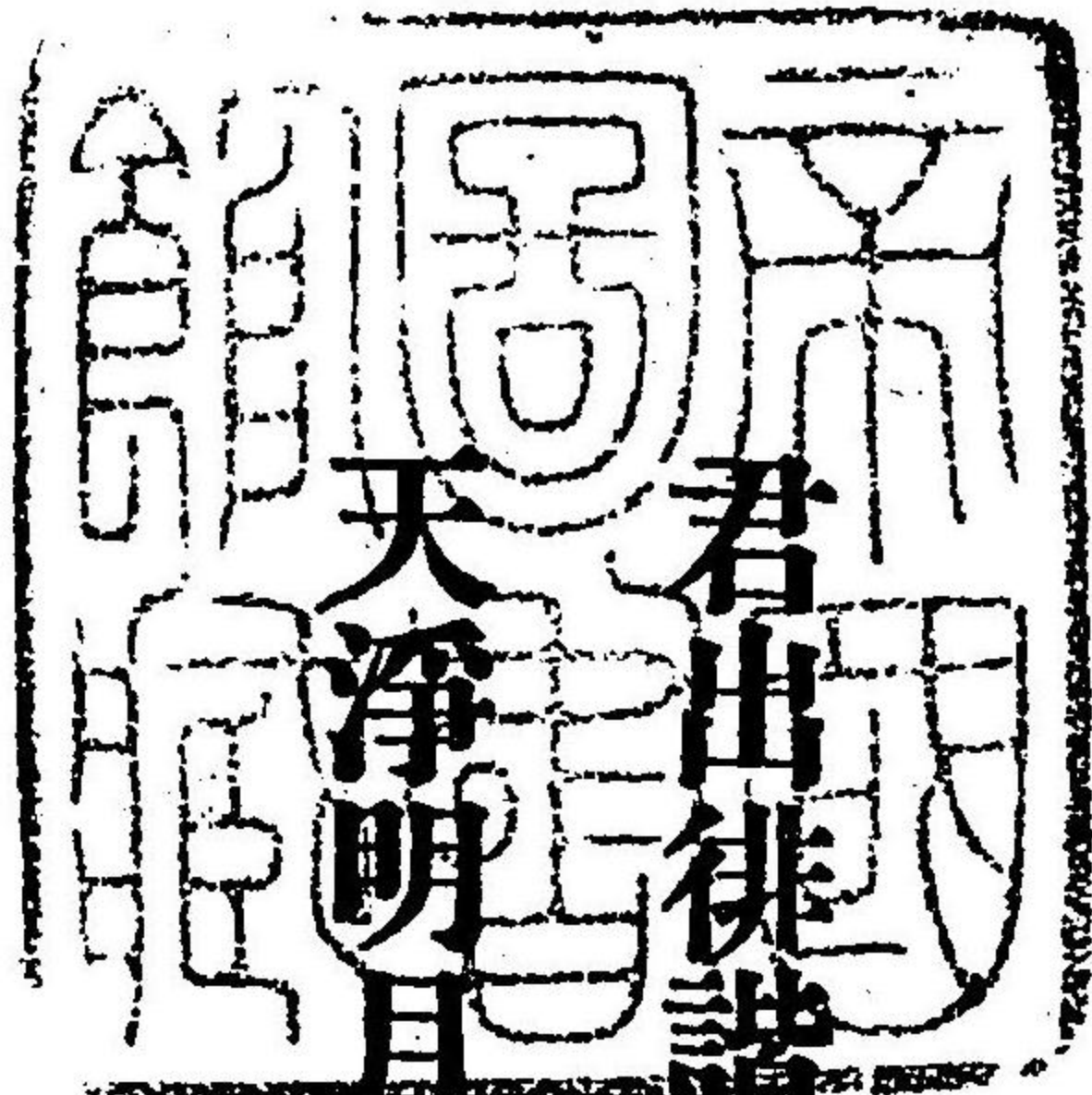


111
32

子規句集

寧齋題

17-268



君出徒諧活
天淨明月孤

君逝文章寂

何處梅花筴

寧齊



題 言

ホト、ギスが初めて東京で發行された頃から、予は子規の句を面白く見て居た。其頃から書き列ねて置いた子規の句が、子規が歿した頃は、千句餘りとあつた。其れは順序もあつた、分類もせず、唯書集めたものであつた。

其頃子規の言行録や隨筆などは出版されたが、句集は出版されぬ。俳人としての子規歿後、其家集の刊行されぬを遺憾に思ふて居た時、人に進められて、一の分類句集を編纂した。其れは句も二千餘り、題句を寧齋に頼み、印刷に着手したのは、卅

六年の暮であつた。然るに間も無く戦争が始まつて、印刷を繼續さるゝ事情が起つた。遂に止むを得ず、半分許り紙型に取つた儘、空しく今日迄打過ぎたのであつた。所が今日に到つても、矢張り何處からも出版されない。乃で再び編纂を改め、四千句許りを收め、斯くの如く出版する事とした。是が計畫してから六年目、丁度子規の七回忌に出る事となつた。子規も晩年には、作句悉くが名吟と云ひ難きも、捨て難い句許りを作つた。老熟の結果である。然るに明治卅年前の作には、随分幼稚なのや、平凡なのが多かつた。で此句集へ採録する場合にも

編者が捨てたもの亦決して少数でない。併しつとめて多くを採る事とした。ソレは必ずしも、佳句でなくとも、子規にも斯かゝる句ありしか、子規の趣味、着想、叙法、即ち作句振りが、斯くも多方面なりしかと、後學の参考に供せんとしたからである。即ち此の句集は子規の佳句、秀吟のみを集めたものではなく、子規の駄句、惡吟を除いた丈の飾りのなき、子規句集である。

明治四十一年秋

編者記

次目集句規子

▲新年之部

▲春之部

▲夏之部

雜	植	動	人	地	時	天	雜	植	動	人	地	時	天				
物	物	事	理	候	文	物	物	事	理	候	文	物	物	事	理	候	文

四三 七二 六六 五五 四八 四五 四三 三二 二四 二〇 一六 一二 一七 一頁

▲秋之部

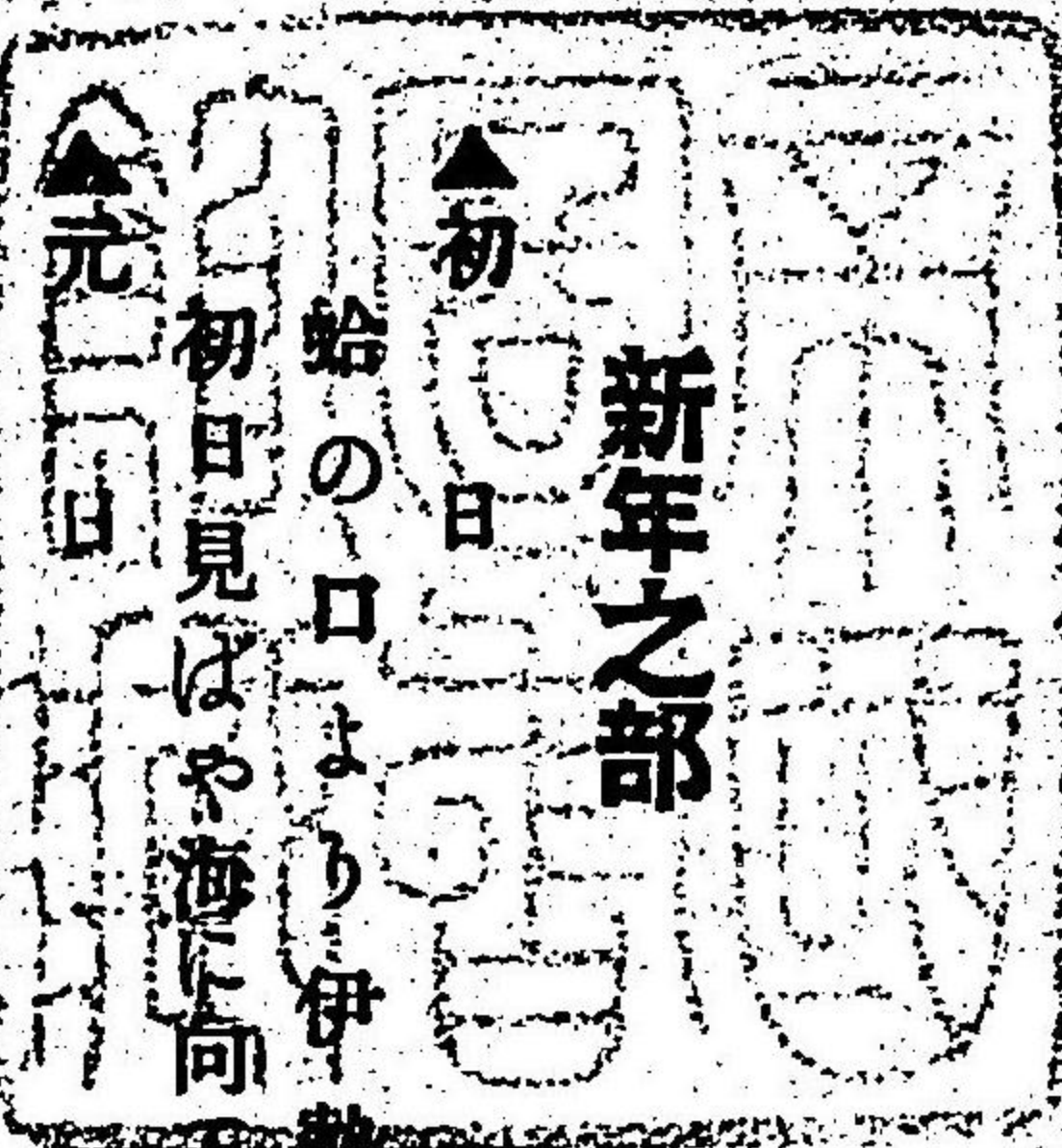
▲冬之部

雜	植	動	人	地	時	天	雜	植	動	人	地	時	天
物	物	事	理	候	文	物	物	事	理	候	文		

一六 一六 一五 一四 一四 一三 一三 一三 一〇 一〇 九 九 八 四
 五 〇 七 七 四 九 四 三 七 五 〇 八 三 四

子規句集

新年之部



▲初日

蛤の口より伊勢の初日哉
初日見ばや海に向て松くねる所

▲元日

元日を天地和合のはしめ哉
元日の病者見舞や駿河臺
元日の人通とはなりにけり
元日に海老の死骸そめでたけれ

●新年之部

瀬川疎山編

▲正月

正月や餅並べたる病の間
一年は正月にあり一生は今にあり
嬉しさの過ぎぬ正月四日なり

▲睦月

ひもじさの餅にありつく睦月哉
▲君か春
立白の重さも問はず君か春

▲御代の春

刀鍛冶は庖丁鍛冶や御代の春
松の内

鏡湯によき衣着たり松の内
回向院角力初まる松の内
蓬萊も家越車や松のうち
口紅や四十の顔も松のうち
吉原の禿遊ぶや松の内
松の内薺打つ日も過ぎにけり

▲四方拜

四方拜その時朝日のぼりつゝ

▲羽子

遣羽子や五人の中の思ひ人

▲羽子板

遣羽子の風に上手を盡しけり
遣羽子や顔のわしろい鼻の墨
遣羽子にまけし美人の怒かな
遣羽子や下宿の窓の品定め
遣羽子や夕飯喰ふて歌骨牌

▲福引

いもうこの羽子板少し劣りたる
羽子板や十五かしらに皆女
福引に公孫勝か手品かな
福引の座敷を照すランプ哉
福引に恥をかきたる女かな
福引のあとで素人の落語哉
福引やよきものとりし下女
福引の我れ貧に十能を得たり

▲歌骨牌

歌骨牌女許りの夜は更けぬ
歌かるた戀ならなくに胸悸哉
蓬萊の一間あかるし歌かるた

▲藪入

藪入や思ひは同じ姉妹
藪入や牛の匂ひも珍らしき

▲門松

門松や我ほとゝきす發行所
門松に右す左す矢來町

▲蓬萊

鶏あいて蓬萊の山明けんぞす
大内は蓬萊山の姿かお
蓬萊の小さく見ゆる書院哉
蓬萊の蜜柑ころけし座敷哉

●新年之部

▲飾

蓬萊のかけや鼠のさゝめ言
蓑笠を蓬萊にして草の庵
蓬萊の齒朶踏はつす鼠哉
蓬萊や鶯のそく籠の外
鼠どもの蓬萊食てしまひけり

▲飾

飾かけし馬車集ひけり日本橋
両側に長き三井のかざり哉

▲輪飾

木曾を出てこの三寶の飾炭
輪飾や町人はいる勝手口
輪かざりに締切である小門哉

▲左義長

飾焚く座敷の庭の日向かな

枯菊にどんどの灰のかゝりけり

▲橙 代々や裏白かくれあつかしき

▲子の日 春の野の子の日に出たり六歌仙

書費

春日野や子の日も過ぎて鶴の聲

▲水祝 存分に水祝は、や思ひ妻

水祝ひ戀の仇と名のりけり

年若き膚うつくし水祝

尋常に水祝はれん酒の酔

▲猿 逃けまはる跛の婿や水祝

門口やはいる所を水祝ひ

猿引や若君抱きし御乳人
竹馬は小猿の燕や叱られし

▲謠 初 あつらわの扇出来たり謠初

謠初謠ひれさめて餘興哉

膳立の茶の間かしまし謠初

謠初近く聞ゆる鼓かな

謠初羽衣既に半ばなり

謠初寶生太夫参りけり

草の家の隣に遠く謠初

扇取るわらべ可愛し謠初

梅いけて謠ひ初めの儀式哉

謠初七日をえらぶ嘉例哉

▲萬 歳 萬歳や黒き手を出し足を出し

▲初芝居 万才は今も烏帽子そ都鳥

歌舞伎座の前通りけり初芝居

初芝居見て来て曠着未だ脱かず

▲二の替 初會我や團十菊五左團小團

さそはれて妻をやりけり二の替

▲傀儡師 正月のもの哀れなり傀儡師

笑ひ合ふ十日夷の笑顔かな

▲雑 煮 解しかぬる碧巖集や雑煮腹

雑煮喰てよき初夢を忘れけり

徳川の昔男や雑煮喰

●新年之部

▲食 積 長病の今年も参る雑者かな

食積に喰ふべき物を探りけり

▲大 福 大福や家に傳はる霰笠

若餅や薺の七日過ぎて後

▲初 卯 風邪ひきし初卯参の美人哉

初夢や松の柱に芽か吹いて

初夢の富士を坐頭に見られけり

▲初 曆 早くりの年數表や初曆

初曆今年はおそき初卯哉

▲店 卸
新宅にかくる釘なし初曆

▲年 禮
嬉しき哉と蕎麥振舞ひぬ店卸

▲書 初
梅さけて来る禮者や七日過
年禮や鳴雪住める眞砂町

▲初 荷
書初に鶴の歌かく檀紙かお
書初や尊圓親王の流を汲む

▲年 玉
瘦馬をかさり立たる初荷哉
窓あけて見れば淋しき初荷哉

▲年 玉
年玉をならべて置くや枕元
年玉や何とも知れぬ紙包み

祝結婚
年玉や同穴の契り番ひ鴨

▲福壽草
盆栽や梅つほみ福壽草黄なり
福壽草貧亡草もあらまほし
煖爐たく部屋暖かに福壽草

▲齒 朶
裏門や小さき輪飾齒朶勝に

▲若 菜
籠提げて若菜摘み摘み關屋迄

▲標
讓葉や齒朶や都は山臭し
破笠子名を改めて把菜と云ふ

▲齊

君知るや三味線草は齊なり

▲初 鴉

銀座出る新聞賣や初からす
四方拜の御庭の霜や初鴉
よき衣の枕邊にあり初鴉
嫁か君

行燈の油あめけり嫁か君
鉄漿壺を踏みなかへしと嫁か君

春之部

▲春 風

春風に尾をひろけたる孔雀哉
春風の吹けとも黒き佛哉
春風にこほれて赤し齒磨粉
薄絹に鴛鴦縫ふや春の風
欄間には二十五菩薩春の風
久松伯露園に赴きたまふに

めでたさに春風吹くや御首途
江の島へ女の旅や春の風
愚庵十二勝の内

靈石洞

春風や眼も鼻もなき石佛
春風や扇流しの裾模様

●春之部

浅草

鳩なくや大提灯に春の風
春の風二つ帆のある小舟哉
春風や起きも直らぬ磯馴松

長谷の観音堂

歌にせん何山彼山春の風
春風や干潟に残る三味の船
春風や都へつゝく松縄手
ぐるりから春風吹くや鳩の湖
春風や鋸山を碎く音
春かせや一膳飯の 大行燈
浅茅生や春風吹けば猫二匹
不破こわて春風吹くや鳩の海
春風や湖を隔てゝ比良の雪
春風や阿波へ渡りの旅役者

八

春風や橋長うして馬二つ
不忍に鶴首の船や春の風
金箔の袂につくや春の風

▲貝寄

貝寄の風に漂ふ玉藻かな

▲東風

夕東風や船の寄る待つ離れ島
夕東風や灯をともしたる漁舟

▲臙

そゝろありく臙月夜や酒の酔
瀬の祭も過ぎぬおほろ月
惟光を一人供したり臙月
下駄借りて宿屋出るや臙月

金州

古寺や戦さのあとのおほろ月

取りのこす棚の糸瓜や臙月
臙月狐に魚をとられけり
だんたらのかつきに逢ぬ臙月

須磨

立ち出てゝ蕎麥屋の門の臙月
幽霊の如き東寺やねほろ月
臙月四條を通る小唄かな
大佛の眼には我等もおほろ哉
遠くとも近くとも見わて灯臙
丈け高き人に逢ひける臙哉
未遂げぬ戀の初めや臙なる
同岸の人家ねほろに下り舟
臙夜や女盗まはかりこと
物にすねて揚屋出る夜の臙さる
臙夜や遠火見乍ら勞れ足

●春之部

▲霞

臙夜やおほろを破る藁礎
臙夜や島原さして小提灯
臙夜や誰を咎むる犬の聲
薄き木立丸き水澤や臙月
兎薬を掲ぐ此頃月の臙なる

▲霞

品川の白帆かすむや遠眼鏡
願みれば行き逢ひし人の霞みけり
日本は霞みて富士もなかり梟
傾城は五階の上のかすみ哉
塔に上れば南住吉薄霞
一錢の釣鐘つくや晝かすみ
霞む日の湖見渡すや橋半は
霞みけり山消わうせて塔一つ

大連海

九

大國の山皆低き霞かな
上市は灯をともしけり夕霞
鞆削るや上野の鐘の霞む日に
其中に富士はつかりと霞哉
大佛の霞まぬやうに御堂哉

從軍船中

日本のぼつちり見ゆる霞かな

黄金山沖

砲臺の舳にかすむ港かな
波間より神の子數多霞むらん
氷魚死んで宇治の川上霞みけり
裾山の土堀る人や遠かすみ
灯一つ星二つ三つ夕霞
霞む日の海に釣して舟の酔
富士うすく雲より上に霞けり

大佛の頭出したるかすみ哉
陽炎

草原や陽炎もゆる捨かやり
陽炎や石の仁王の力瘤

神清山蘇山人

陽炎や日本の土にかりもがり
臺灣や陽炎毒を吹くさうな
陽炎や小松の中の古すゝき
陽炎のはつたりやみぬ雲の影

建長寺

陽炎となるやへり行く古柱

神田大火

陽炎や三千軒の家の跡

春日影

鬚の子の足に波うつ春日かな

紫の硝子にうつる春日哉
水低に魚の影さす春日哉
翠帳にさしこむ春の朝日かな
橋を行く長柄の傘や春日影
春日さす庭の小松葉臺立ちぬ
紫の袴をつけし春日かな
韓王の行列來たる春日哉
春の日や賞牌胸に美少年
さら／＼と鳥の飛び行く春日哉
美しき鳥に餌をやる春日かな

▲春の雲

大佛や花にもならぬ雲の上

▲春の月

宴果て、車呼ぶなり春の月
吉原の裏を通るや春の月

●春之興

▲春の雨

一里行く春の月夜や村芝居
春の月戀する人を照しけり
婚禮の乗物多し春の月
目さませは我裾に春の月出てたり
妓を連れて上野を下る春の月
須磨を出て明石は見わす春の月
下町や女も交る春の月
春の月すたれの外にかゝりけり

春雨や傘さして見る繪草紙屋

新戰場

血の跡の苔ともならで春の雨
鴛鴦の濡れて居るなり春の雨
宇治川やはつり／＼と春の雨
松島の紀行直すや春の雨

黄鳥の湯殿のそくや春の雨
烟見ゆる杉垣低し春のあめ
風呂の蓋取るやはつゝ春の雨
垣低し番傘通る春の雨
傘さして傾城なふる春の雨
春雨や金箔はけし粟田御所
春雨や傘高低にわたし船
律院の苔の光や春の雨
春雨や追込籠に黄なる鳥
春雨や襖の下なる赤い花
苔を包む紙のしめりや春の雨

諸曲殺生石を讀みて

會の日や晴れて又降る春の雨
屋根のある橋に物賣る春の雨
黄昏や松に消ね込む春の雨

初雷
初雷や物におとろく病上り
はつ雷の二つ許りで止にけり
初雷を恐るゝ妻や針仕事

立、春
蕪村集に春立つと云ふ句なかり息

春の夕
美しき春の夕や人ちらほら
宮島や春の夕浪うねり来る
宿とりて春の夕の假寝かな

逆上す春の夕の仇こゝろ
うたゝ寝に風邪ひく春の夕哉

▲春の宵

寢よとすれば門叩く也春の宵

東京

紫の灯をこもしけり春の宵
若き時は酒も呑みしか春の宵

▲春の夜

春の夜や奈良の町家の掛行燈
酒樓に遊ひて

春の夜の三味線箱を枕かな
春の夜の三保の松原烟立つ
春の夜の讚美歌うたふ男女哉
ほれられて通ひし春の夜も昔
春の夜や屏風の蔭にもものゝ息

●春之部

大阪

春の夜の鈍子に寝た旅籠哉
うたゝ寝に春の夜浅し牡丹亭
春の夜や料理屋を出る小提灯
春の夜や無紋あやしき小提灯
春の夜の明なんとする廊哉
春の夜の燈心長き行燈哉
春の夜や隣を起す忍ひ聲
縁日の油煙に春の夜は更けぬ
春の夜の風引聲や禿呼ぶ
春の夜の旅草臥や道中画
春の夜の二階三階灯をこもす
春の夜を尺八吹いて通りけり

▲春の日
春の日や草花賣の脊戸に来る

二三

▲暖か

赤飯の湯氣暖かに野の小店

吳港

大船や波わたゝかに鷗浮く
釣り上げし魚の光りや暖かき
暖かな窓に病氣の名残かな
暖かき座敷の庭に洗濯す

▲冴返

今かへす冬の發句を冴返る
鶴病て梅散る頃や冴返る
なにかしの忌日そ今日は冴返れ

▲春寒

春寒き手を握りたる別れ哉

▲餘寒

泥深く蛤ひそむ餘寒かな

▲二月

梅檀のほろ／＼落つる二月哉
乞食のそろ／＼ふねる二月哉

▲長閑

長閑さや檐端の山の麥畑
長閑さを獨り往き獨り面白き
名物の餅を搗き居る長閑さよ
のどかさや案内連れし田舎人
長閑さに晝餉も食はて歩きけり
行き過ぎし短き驛や海長閑
長閑さや障子明れば野が見える
長閑さやつ／＼いて見たる蟹の穴
鶴の首長閑に龜のあたゝかに

▲日永

鳳凰も鳴かず日永の不老門

●春之部

パノラマを見て玉乗を見て日の永

永き日を蟻上るらん塔のさき

高麗船の來ると許りに日永哉

永き日や松の梢に鶴の首

永き日を蝦夷の草原田ともあらず

永き日の志賀の山越ね湖見にて

長安の市に日永し賣卜者

金州

永き日や驢馬を追ひ行く鞭の影

永き日や人集めたる居合抜

引きすてし大鋸の日永かな

大船に水汲んで居る日永哉

金比羅に大繪馬あける日永哉

パン賣の太鼓も鳴らず日の永き

追込の鳥早く寝る日永哉

拾級に蟻道ひ上る日永かな
舟と岸と話して居る日永哉

▲三月

三月や小松の枝に雀二羽
行春

紙あます日記も春の名残かな
行春やほうくとして蓬原

金州にて

行春の酒を玉はる陣屋哉
行春や女のせたるいくさ船

忍戀

行春や忍戀てふ題を得たり
行春や商人船の立烏帽子
行春を翠帳の鶉鴉黙りけり
春深く腐りし蜜柑好みけり

一六
筈に虫齒痛みて暮の春

歐羅巴へ行く人の許に根岸の笹の雪を
贈りて

日本の春の名残や豆腐汁
植込に春行かんとす何の花
行春の烏帽子買けり白拍子
春惜む一日画をかき詩を作る
病人に酒強ふる春の名残かな
還幸を拜する春の名残哉
行春の石ともならずて尼一人
夕雲のいさよふ空や春の行
須磨の浦に浪うつ春の名残哉

▲残雪

残雪に鶏白き餘寒かな
雪残る頂き一ツ國境
霜よけの垣の北側のこる雪

▲苗代

苗代の雨みどりなり三坪程
苗代や許六の蛙史那の龜
苗代や第一番は善通寺
苗代へ分るゝ水の目高かな
蛙あぐ苗代小田さなりにけり
苗代や短冊形と色紙形
御影供こめて十日の雨や苗代田
野の森や苗代時の薄ぐもり
苗代や水を離るゝ針の尖

▲焼野

焼けなから黒き實残る野の葎

●春之部

▲焼山

山焼とばかりに空のほの赤き
雨ならん山を焼く火の廣がりぬ
出て見れば南の山を焼きにけり
焼山の太石ごろりゝかな

▲沙干

貝どりの沙島へつゝ沙干哉
汽車に乗て沙干の濱を通りけり
雲に入る沙干の人や安房の山
鯛得て舟に戻るや沙干狩
末の子や沙干の留守の雛遊び
二舟に沙干の連れを分ちけり

沙干より今歸りたる隣かな
沙干瀉うれし物皆生きて居る
沙干瀉隣の國へつゝきけり
墨吐いて烏賊の死に居る沙干哉
大船の低のそきたる沙干かな
大船の眞向に座る沙干哉
叙の主を尋ぬる沙干かな
海苔取の知らす顔ある沙干哉
貝のつきし岩あらはるゝ沙干哉

▲氷 解

氷解けて古藻に動く小海老哉

風釜

氷解けて水の流るゝ音すなり

▲水 温

薑の立つ菜を洗ひけり温む水

裏溝やれ玉杓子の水温む
水温む南に鯉の集ひけり
馬の沓沈みてぬるむ清水哉
上水の温みし粥の名残かな
水草は底に萌ゆるん水温む
ぬるむかよれば清水の氷哉
氷張る谷の小川や末ぬるむ

▲春の水

春水や圍ひわけたる金魚の子
橋錢を五ツ掛けたり春の水
鯉刎て浅き鹽や春の水
鯉の脊に春水をぐ鹽かお
鯉の吐く泡やたらひの春の水
鯉多く狭きたらひや春の水
春水に鯉の活きたる鹽かな

春水のたらひに満ちて鯉の肩

頭並ぶ鹽の鯉や春の水

鹽浅く鯉の脊見ゆるの春水

春水の鹽に鯉の唼鳴かな

不忍に蓮の芽見ぬす春や水

春の水蛇籠に添ふて流れけり

下總の國の低さよ春の水

春の水出茶屋の前を流れけり

底見わて何草青む春の水

橋踏めは魚沈みけり春の水

春の水都に入りて濁りけり

▲春の海

美しき海月浮きたり春の海
塔に上れば南住吉春の海
島々に灯をともしけり春の海

●春之部

肺病を養ふ春の海邊かな

▲春の野

春の野や何に人行き人歸る

三味線を掛たる春の野茶屋哉

女連れて春の野ありき日は暮ぬ

春の野や女四五人辨當持

▲春の山

麥畑や刻みあけたる春の山

春の山重なり合ふて皆丸し

欄干と平らに春の山低し

春の山浅きに蘭を尋ねけり

上麓の駕に逢ひけり春の山

春の山越わて日高き疲れ哉

春の山女夫の神を祭りけり

金州

城壁の上に見わけり春の山
焼石や春の裾山草もなし

▲山 笑

恐ろしき灘を隔てゝ山笑ふ
笑ふ山中に妙義の六ヶしき
兀山の笑ふすへさへ知らぬなり

▲春の川

一桶の藍流しけり春の川
橋を渡り橋を渡る春の川二つ
此の橋の上に橋あし春の川

▲雪 解

雪解けて雪踏の音の嬉しさよ
雪解に馬放ちたる部落かな
雪解けて熊來すなりし村の市
雪解や竹はね返る日の表

▲春の湖

岩の間にうづまく春の湖かな

▲畑 打

日一日同じどころに畑打つ
子を負ひて獨り畑打つ婦哉
榛の木の下に畑打つ一人哉
武藏野や畑打ち廣けく
我行けは畑打やめて我を見る
雲無心南山の下畑打つ

▲茶 摘

摘溜し手のひらの茶の穢れ臭
夜芝居や晝の茶摘の疲れ顔
五夫人茶をつむ岡の高み哉

一番茶二番茶既に摘みにけり
寝ぬ戀の眠たき節や茶摘唄

▲出 代

出代の傘をさしたる女かな

▲餅 脰

春寒き南近江や餅あます
餅脰草津の驛は荒れにけり
尙白の家に會して餅脰

▲草 餅

鄙はものゝ蓬の餅も四角なる
草餅の草の多きも田舎かな

▲爐 塞

爐塞いて遠公がもとに訪よりぬ
爐塞いて草鞋はき居る首途哉

▲煖 爐 除

煖爐取りて六疊の間の廣さ哉

▲曲 水

曲水の詩や盃におくれたる

▲紙 鳶

勿然と紙鳶落來る小庭かな
揚りつく嬉しさを風の切てけり
暫し風うけつ梢のかゝり風
小さき子の小さき風を揚て居る
大風や伽藍の屋根に人の聲
切れ風の廣野の中に落にけり
二村の風集まりし河原かか
大風に近よる鳶もなかりけり
糸のべて紙鳶の尾垂るゝ水田哉
無常
切風の切れて歸らぬ行方哉

▲彼岸

牡丹餅の晝夜を分つ彼岸哉
ほろくくと椿こほる彼岸哉
手に寒き彼岸の小銭こぼしけり

▲寒食

寒食の村を過ぎ行く飛脚哉
寒食や庚申堂の線香立

▲雛祭

雛立て、花屋呼び込む戸口哉
天冠をひなに、着せけり桃の花

皇太子殿下御結婚の事うけたまはりて

伏して思ふ雛の如き御契
おひたしく古雛祭る小家哉
古雛の古きを愛す男かな
家浅くひな立て、ある店の先

晝過や隣の雛を見に行かん
白酒の酔や雛に恨みあり
雛棚の小さき雪洞灯のともる
雛の影桃の影壁に重なりぬ
思ひ出に雛と遊はん夜もすから

賀新婚

比翼連理棚の雛と契るべし

娘をうしなひたる人に

佛壇に飾りてぞあらん古雛

従軍

首途やきぬく惜む雛もなし
雛様の知らぬ道具や煙草盆
雛あらば娘あらはと思ひけり

▲二月堂

永き日の暮れんとすなり二月堂

▲薪能

群れ上る人や日永の二月堂
水取や杉の梢の天狗星
薪燃わて静の顔を照しけり
降らで止みし朧月夜や薪能

▲摘草

里人は土筆も食はず蓬摘
蓬摘むや鶯おそき蟹か里
後ればせに蓬摘む也彼岸過
摘草やげんくの束茅花の束
學校へ行かぬ子たちか蓬摘
道はたや漁村の娘蓬つむ
灸にする餅にする蓬摘にけり
摘草やよき衣着たる女の童
つみ草や根岸を出て、田甫道

●春之部

▲接木

或草は根深くつみて爪に土
摘草や裁縫の師につれられて
摘草の約あり淀の小橋まで
摘みたりし去年の丘に草もあし
行くとしもなく摘草の夢野哉

▲草種蒔

接木して椽に橐駝か物語
燭をとつて雨の接木を見る夜かな
後園の接木を覗く散歩かな
濡れ乍ら接木して居る小雨哉

▲踏青

後ればせに朝顔時きつ未だ生へず
庭に出て、物種まくや病上り
幼子や青きを踏みし足の裏

▲二日灸

死はいやぞ其きさらぎの二日灸

▲鞆 鞆

ふらこゝの遊びに飽きし女哉

▲上り築

魚肥のたり七十二灘上り築

▲涅槃會

古店や買人もなくて涅槃像

睡猫圖

餌すなり涅槃の寺の裏門に

▲繪 踏

牡丹咲く浄土の寺に繪踏かな

▲人磨忌

橘の曙覽の庵や人丸忌

▲摩耶祭

馬の灸の張紙出たり摩耶祭

今流行る馬の病や摩耶祭

馬飾る心やさしや摩耶祭

馬の子や親につれたつ摩耶祭

▲初 午

初午に鶯春亭の行燈かな

初午の更けて狐の夜となりぬ

初午や江戸は屋敷の多き事

初午や柳のうつる藪の穴

▲鶯

鶯や黒木つたひに入瀬小原

藤澤 二句

鶯やおもて通りは馬の鈴

鶯や左の耳は馬の鈴

書

鶯や寺子屋へ行く道の藪

鶯のうたゝ眼白の眼を妬む

草庵

飯たかぬ朝も鶯鳴きにけり

鶯や低い茶の木の中て鳴く

鶯や銃さけて森を出づる人

黄鳥や顔見られたる道のはた

うくひすの足跡細し鍋の尻

黄鳥や枯木の中の一軒家

鶯の梅島村に笠買はん

うくひすや馬子を相手に鈴鹿越

黄鳥の淡路へ渉る日和かな

猿男の近火の時

●春之部

鶯のむれてね見舞申すなり

鶯や朝寝を起す人もあし

病中

うくひすの梅に下痢する餘寒哉

鶯の今朝もなくなり楢の枝

▲燕

海苔魚朶に遊ぶ漁村の燕かな

首途の日に見初めたる乙鳥哉

吊したる鷺の埃や燕の巢

もとの巢へ乙鳥の卵かへしけり

乙鳥の過ぎ行くあとや傳令使

あたらしき主に馴るゝ乙鳥哉

出女の聲の中とぶ乙鳥かな

大橋の長さをはかるつはめ哉

行きゆきてひらりと返す燕哉

金州

戦ひのあとに少なき乙鳥哉
日光の向ふ上りにつはめかち

送別

乙鳥のうしろも向かぬ別れ哉
引舟に乗て引かるゝ乙鳥哉
すれ違ふ汽車の小窓の燕哉

祝移徙

燕の巢まで移してしまひけり
乙鳥の太平洋へのして行く

▲歸 雁

大聲に鳴き行く雁の名残かな

論曲殺生石を讀みて

殺生石の空や遙かに歸る雁

宮女北國より來る

行かんとして雁飛び戻る美人哉
歸る雁風船玉の行方哉

▲引 鶴

鶴引や蓬萊の松遠かすみ

▲鳥 歸

旅鳥歸るところもあかりけり

▲雲 雀

野はくらく雲雀一羽の夕日かな
市川の渡船わたれば雲雀哉
麥畑や驢馬の耳より揚雲雀
晝中や雲にとまりて鳴く雲雀
雲を踏み霞を吸ふや揚雲雀
神の子に追はれて上る雲雀哉
江戸迄は見えじ浪花の揚雲雀
子雲雀のそたつ日頃や麥の風

▲鷹化爲鳩

鳩鷹鳩になるや二代の君愚なり
鷹鳩に雀の代とそありにける
鷹鳩にゐる遠曆の祝かな
鷹は鳩に鉄砲は豆に御世静か

▲雉 子

雉鳴くや那須の裾山家もなし
尾をかはす雉の番や臺の上
蛇に噛まれて鳴くか雉の聲
雉の子を取りて歸るや雉の聲
雉の尾のつゝじにさはる長さ哉
裾山や雉子かくるゝ杉の苗
雉ないて盤梯山の崩れけり
山路や雉去つて人あらはるゝ
雉子一羽吊りし山路の茶店哉

●春之部

▲孕 雀
空家や孕雀の夕かせき
捕へたる孕雀を放ちけり

▲親 雀

いそかしや晝飯頃の親雀

▲子 雀

腹中に吹矢立ちけり雀の子
垣に來て雀親呼ぶ聲せはし

▲鳥の子

木公に示す

鳥の子の飛ぶ時親はあかりけり

▲鳥の巢

町中の高き銀杏や鳥の巢

▲春の猫

内のちよまが隣の花を待夜哉
竹椽をふみわる猫の思ひ哉
三匹になりて喧嘩す猫の戀
五器の飯ほとびる猫の思かや
忍ぶれど猫に出にけり我戀は
両方で睨み合ひけり猫の戀
うき猫をくどく聲音や屋根の上
松の木の間にかけ込む猫の戀

▲鹿角落

角落ちてあちら向たる男鹿哉

▲獺祭魚

獺の祭を画く意匠かな

茶器どもを獺の祭の並べ方

▲蝶

蜘蛛の巢に胡蝶の壳のあはれ也
ひらくと蝶々黄かり水の土
蝶いろく揚羽山女郎なんと来る
此の居る花に過ぎ行く胡蝶哉
小比丘尼のつまみ兼たる胡蝶哉
横に組み縦にほくれつ蝶二つ
風に來て石臼たのむこてう哉
牛糞に止らんとせし胡蝶哉
蝶飛ぶやアダムもイヅも裸也
蝶とふや驛々の子守唄
蝶々や順禮の子の後れ勝
淺草や鴉の羽風離れ蝶
椽へ出て偶々蝶を見る日かな

茨にかけし胡蝶の羽の破れたる
花多き隣へ去りし胡蝶かな
庭に來る胡蝶嬉しき病後哉

▲虻

障子明け居れば病床に虻の來る

▲蛤

蛤と海草を縫ふ補襦かな
繪の島の蛤分つ土産哉

▲蜆

梅多き寺島村や蜆賣
蜆買ふ長家の窓の高さ哉
手に滿る蜆嬉しや友を呼ぶ
江戸詰も忌に久しき蜆汁
よく見れば薄紫の硯かな

▲馬刀

●春之部

▲蠶

面白や馬刀の居る穴居らぬ穴
麥主の蠶飼美む話かな
蠶飼する國や佛の善光寺
信濃路や宿かる家の蠶棚
芍薬の開く天氣や二眠起
金絲鳥に餌やる蠶飼の暇哉
一夜二夜夜を寝ぬ蠶飼盛かな
婆殿の念佛講や蠶飼時
道端の小家々々も蠶飼哉
寢所もなき賤か家の蠶飼哉
蠶飼する村過き行くや藥賣
田を賣りて今年初むる蠶飼哉
蠶飼する村に宿屋もなかりけり

▲蛙

くゝとなく晝の蛙ぞうとまじき
夜越わして麓に近き蛙かき

脩居雜詠

蛙なけ蛙やしなふ君か爲め
蛙なく淺瀬もありや大井川
蛙あく水や上野の臺の下

俳壇を退きたる露石子に

知るや蛙露石は今年聾あり

松山堀端

門しめに出て聞て居る蛙かな

露石子の爲めに

蛙を愛す蛙露石を愛す哉
石垣や蛙もなかず深き濠
蛙なく水田の底の底あかり

金州

三〇

蛙はや日本の歌を詠みにけり
今もある戀の棚橋鳴く蛙
吉原の火事うつる田や鳴蛙
雲雀派と蛙派と歌の議論哉
樋の口にせかれなからや啼蛙

▲蛙子

金州

外濠の水腐りけり蛙の子

▲田螺

小山田や田螺なき出す雲の中
佗びぬれば田螺なく也終夜
水口に集まつて來る田にし哉
磊々として田螺落々として焼豆腐
田螺とりて田螺賣るなり家もなし

▲地虫出穴

論曲殺生石を讀みて

▲蛇出穴
玉虫の穴を出でたる光りかな

神いまだ穴を出でざる白蛇哉
蛇穴を出て三分の天下かな

▲若鮎

砂川や小鮎ちらつく日の光

石手川出合渡

若鮎の二手になりて上りけり
足元に小鮎とふなり夕間暮
玉川や小鮎たはしる晒し布
小鮎釣る橋より上のわたり哉
夕暮の小雨ふり出す小鮎哉

▲櫻

夜櫻や大雪洞の空うつり

上野 二句

黒門に丸の跡あり山ざくら
晝中や櫻にこもる人の息
盆栽の小櫻早し京の市

須磨

敦盛の塚に櫻もなかりけり

松山十六日櫻

嘘のやうな十六日櫻咲にけり
大櫻唯一本のさかりかな
うかれ心瓶の櫻に灯をさもす
別荘の櫻妾宅の柳かな
植半の鼓聞ゆるさくら哉
我病んでさくらに思ふ事多し

手向けはや餘寒の豆腐初櫻
椽はたへにじり出たり初櫻
乞食の身ふるひするや初櫻
夕暮を脊戸へ見に行く櫻哉
折りまゐらせて初櫻と申ける
名をもたぬ京の櫻はなかり鳧
釣鐘の雲にぬれたる櫻かお
三井寺を上るともしや夕櫻
山あれて鐘もさくらは霞の音
すうと出た櫻の枝に目白かな
従軍

従軍

出陣や櫻見なから宇品まで
芳野山第一本のさくらかな
南朝の恨みを残すさくらかな

▲花

馬車の上に垂るゝホテルの櫻哉
常盤津の會ある寺のさくら哉
子を負た手に櫻もつうしろ哉
橋長く水青うして松櫻
公園の入口見わたさくらかな
新道に瘦せたる柳さくらかな
汽車の窓に見上る岡の櫻かな

古白一周忌

今年また花散る四月十二日

上野に遊ぶ

大佛をうつめて白し花の雲
交番やこゝにも一人花の酔

向島園

此の花に酒千斛と積りけり
花に雪駄ちやりと人の機嫌哉
浮世とは下戸の嘘なり花に酒

従軍

行かは我れ筆の花散る處まで

菅笠に題す

此上に落花積れと思ふかな

金州

花盛ふるさどや今更衣
朱の鞍や花の吹雪の馬つなぎ

●春之部

松杉や花の上野の後側
六田越ねて花に急くや一の坂
花見わて足踏み鳴らす上り口
花の山龍王權現鎮まりぬ
指すや花の木の間の如意輪寺
案内者の楠語る花見かな
寐て聞けば上野の花のさわか哉
花さいて王子の森の黒さかな
花ちるや法華の太鼓禪の鐘
案内者も我等も濡れて花の雨
千本が一時に落花する夜やあらん
西行庵花もさくらもなかり鳧
花の中に運動會の圍ひかな
花に来て錢掏られけり田舎人
錢盡きて京に入る日や花さかり

工夫して花にラムプを吊し
小坊主や花見の供のひもじ顔
我病んで花の匂もなき句帖哉
花の雨わづかに霽れて群集哉
三味線に樽をかけたる花見哉
宮方や花の御宴の主人役
橋杭の間をこき出る花見船

上野

吉原を見下ろす花の茶見世哉
花に酔うて頭痛すと云ふ女哉
道入てはくつては出ては花の雲

夢中吟

骸骨となりて木蔭の花見哉

▲梅

子に傳ふ笛の秘曲や梅の月

火を焚かぬ煖爐の下や梅の鉢
お梅見の白粉厚き寒さかな
奥に灯あり梅園の門鎖したる
園の梅散るや火のなき煙草盆
月に望んで梅ありと思ふ江の南
江東の梅少しく月に後れたり
影ふんで梅の小路を戻りけり
黒塀や星に透かして梅を待たり
盆栽の梅ちりかゝる硯哉
萬才の鼓にひらく梅の花
野の道や梅から梅へ六阿彌陀
僧房の廣き窓に梅の影疎なり
侍の野梅折りけりおとしざし
梅を見て野を見て行きぬ草加迄

別題

さぬくの使参りの梅の花
瑞垣や杉ほの暗く梅白し

何と云ふ鳥か知らねど梅の枝
岡あれば宮宮あれば梅の花
蛭急に梅ことく斜なり
柿畑に去來のあとや梅の花
盆栽の梅早く福壽草遅し
家一つ梅五六本こもく

鶴が岡

銀杏とはどちらが古き梅の花
鎌倉は井あり梅あり星月夜

鎌倉の宮

梅か香にむせてこぼる涙哉
梅ちらりくと松の木の間哉
あはれなり大根畑の梅一木

●春之部

大砲や城あとあれて梅の花

紀元節

二千五百五十六年梅の花

悼

いたはしや梅見て人の泣き給ふ
裾山や畑の中の梅一木
月二更廊下にみつる梅の影
梅白く庭の禿倉に灯をこもす

▲紅

梅

紅梅の落花をつまむ壺かな
紅梅に中日すきし彼岸哉
紅梅や平安朝の女達
紅梅の鉢や寝て見る置所
梅の中に紅梅咲くや上根岸
紅梅や返歌まち居る文使

▲柳

温泉の町に紅梅早き宿屋哉
紅梅の散りぬ淋しき枕元
紅梅のしたれし枝や鳥も來ず
紅梅や萬歳ばかり烏帽子にて

元山の麓に青きやなきかな
柳あり舟待つ牛の二三匹
家主の無残にきりし柳かな
門口に十日の雨の柳かな

金州

城門を出て遠近の柳哉

可全を廣島段原村に訪ふ

上下に道二ツあるやなき哉
王城や大路の柳小路の花
燒跡の道になつたる柳かな

大門や柳かぶつて灯をともす
故郷に我が植に置きし柳哉
この橋も向ふの橋も柳かな
辻駕に朱鞘の出たる柳哉
土手一里依々戀々と柳かな
史家村の入口見ゆる柳かな
橋落ちてうしろ淋しき柳哉
京人のいつはり多き柳哉
金州の城門高きやなき哉
四五本の柳とりまく小家かな
文君の酒屋ありける柳かな
旅立ちのあとに淋しき柳哉
枝長く柳活けたる花屋哉
町の柳十本毎に灯をともす
柳植てよき名を彫りし小橋哉

▲桃

柳櫻柳櫻と植えにけり
川ありと見わて列なる柳かな

草家二軒紅白の桃咲けるかな
昔爺と婆と住みけり桃の花
茶店あり白馬つなく桃の花
桃さくや古き都の子守唄
水仙の花のさかりや桃の花
飯くはす小店もなく桃の花

▲松

緑

舟形に作りし松のみどりかな

▲連

翅

連翅や束ねられたる庭の隅
連翅に一閑張の机かな
鉢植の連翅に來る小鳥かな

●春之部

▲梨

花

梨老いて花まばらなり韭島
梨白し此の頃美女を見る小家
鞆の影静かなり梨花の月
梨咲くやいくさの趾の崩れ家
對の屋に灯の残りけり梨の花

▲山

吹

山吹や人形かわく一むしろ
山吹の下へはいるやどせう取
竹垣や雨の山吹土こ伏す
山吹やいくら折つても同じ枝
山吹や何がさわつて散り初め
山吹の毎日散て井淺し
古井戸や山吹散つて魚遊ぶ
山吹の溝に垂れたる垣根哉

山吹の花踏みつけし跡哉
山吹や公事に上りて借屋敷

▲躑躅

下り舟岩に松あり躑躅あり
伊豫太山寺

茜蕪につゝじの名あれ太山寺
紫の夕山つゝじ家もなし
旅人のつゝじ引抜く山路哉
大木のつゝじ見に来る野寺哉
妹か門つゝじをむしる別れ哉
馬曳いてつゝじの小道歸り行
岡に添ひて躑躅の多き小道哉
躑躅まだ咲かで淋しき園生哉
かけはしやあぶない所に山躑躅

岩角やつゝじ花さく齒朶隠れ
つゝじ多く石碑立たる茶店哉

木會映中

大岩のわれめくや岩つゝじ

▲木蓮花
木蓮や讀書の窓の外側に

▲海棠

杉垣に海棠さくや上根岸
海棠の鉢をかゝべて歩きけり
海棠の鉢植に置きし衣桁哉
海棠に鏡立てたる化粧かな
海棠や灯火うつる閨の窓
海棠に大名とまる日は高し
海棠に遊ぶ二人の禿かな

▲椿

灰吹にしたあともあり落椿
笹原や笹の中なる落椿
鉢植の椿落ちけり鉢の中
可全妻を迎ひたるに
祝は、や花婿花嫁花椿
轉居して椿咲く庭梅ちる戸

隣醫瓢を花活に遣り椿を活けて

贈り来る稽滑の人也

捻くり者あり瓢屋椿を呼べる
一つ落ちて二つ落ちたる椿哉
白椿落ちてくさりし日數かな

子を擧げし人の祝に

玉椿玉のやうな子すこやかに
赤門を入れば椿の林かな
流れ得さる水のとよみの椿哉

●春之部

▲藤

藤咲いて眼やみこもるや薬師堂
手に提て藤土につく嬉しさよ
山藤や短き房の花さかり
上根岸三島神社祭禮

修復成る神杉若葉藤の花
法然上人贊

念佛に季はあけれ共藤の花
反橋や池を繞りて藤の棚
藤棚や池を繞りて屈曲す
藤棚に提灯つるす茶店哉
藤の花長うして雨ふらんとす
木の末をたわめて藤の下りけり
物好に藤はせけり庭の松

▲木の芽

樽の芽や結城の便り聞えざる

四阿に巻貫ふく木の芽哉

そぼふるや黒木の鳥居木の芽吹

木々の芽や新宅の庭調はず

襦袢干す低き小枝の木の芽哉

下り立て見廻る庭の木の芽哉

枯し木の枯ざる枝や芽を吹きぬ

木逆の花は落ちたる青芽かな

大砲のどろくと鳴る木の芽哉

▲萩の芽

萩の芽に犬ころ愛す小庭哉

病間あり

足の立つ嬉しさに萩の芽を檢す

▲萱の芽

萱草やこゝに芽をふく忘草

▲菖蒲の芽

芹生にし泥溝の流や菖蒲の芽

▲春草

血の跡の井戸に盡たり春の草

なき人のむくろを隠せ春の草

馬市のあとや馬糞春の草

▲若草

若草に雲雀と遊ぶ小供かな

▲辛夷

唐人の辛夷を画く坐興かな

▲虎杖

虎杖も蕨も伸びぬ山の様

▲下萌

下萌を催す頃の地震かな

▲薄の芽

薄の芽もねぬ病のいわるべく

▲牡丹芽

三年目に蕾たのもし牡丹の芽

牡丹の芽ひたぶる霜を恐れけり

▲蘆の角

干網の下から芦の芽だち哉

▲菊の苗

菊苗に水やる土の乾きかな

▲種芋

種芋を植えて二日の月細し

▲菜の花

菜の花や小娘一人此大家

菜種咲いて小村近しと見ゆる哉

兼平の塚とりまいて菜種咲く

菜の花や野中の寺の椽の下

●春之部

菜の花の小村豊かに見ゆる哉

菜の花の四角に咲きぬ麥の中

菜の花に婚禮したる狐かな

菜の花や岡崎女郎衆人を呼ぶ

菜の花の少し許りは見ゆる哉

村ところ／＼菜の花見ゆる哉

家遠近暮れて菜の花遙か也

菜の花に添うて路あり村稻荷

菜の花や梅を隔て、淡路島

上り帆の菜の花の上に見ゆる哉

菜の花も山吹もさく小庭かな

▲土筆

道の邊に偶々土筆ひとつかな

土筆煮て飯食ふ夜の臺所

杉菜多き土手に出たり土筆狩

▲芳 草 町近き野邊に乏しき土筆かな

▲落の臺 落花流水草芳はしき裾模様

▲蕨 蕨の臺ほうけて瓶にさゝれけり
店先に蜜柑腐りぬ落の臺
鉢植の蕨の葉伸ひて臺枯れぬ

▲五 形 山焼いて十日の市や初蕨

▲蒲公英 我庭にげんく咲ける嬉しさよ
手にあまる五形の束を捨にけり
苗代やげんげの束を捨てゝある

▲蒲公英 蒲公英に胡粉こほすや土細工

道芝や蒲公英の花低く咲く
たんはゝや細工にすべき花の形
道古りて蒲公英開く皆かな
剝製の雉たんはゝの造り花
春更けて蒲公英の花咲けは散る
蒲公英やポールころけて通りけり
蠻子營砲臺
外側に蒲公英咲ける臺場哉
蒲公英やローンテニスの線の外

▲莖 花莖討死の塚ところく
下草に莖咲くあり小松原
貝塚へ曲る小道のすみれ哉
莖より小さき花を摘みにけり
裏門を出つれば野邊の莖かき

▲大根花 春日野の女くさゝよ花すみれ

▲海 苔 大根の花さく彼岸日和かな
梅散るや海苔干す磯の夕曇
新海苔の市に上りぬ初さくら
海苔鹿朶に海苔の少なき餘寒哉
新海苔や肴乏しき精進落
新海苔の一帖つゝを土産かな
大森や海苔取る頃のおほろ月
海苔漉を見に寄る梅の廻り道
海苔を干す家許りなり南向
閣に坐して海苔採舟の眺め哉

▲韭 韭剪つて酒借りに行く隣哉

▲芹 鱸肥え根芹こはゝる彼岸哉

芹薺汽車道越ねて三河島
雨に友あり八百屋に芹を求めける
苗代の濁り流れて芹の花
田の中や芹摘みて去る足の跡
▲繁 蕪 金絲鳥の餌に束ねたるはこべ哉

▲花 蒔 紫の花に刺ある蒔かな

▲春 雜 旅なれば春なれば此朝ほらけ
西洋の花を植えけり春の園

名も知らぬ春の小鳥や腹青き
布圍着て手紙書くなり春の風邪
詠人を知らざる春の秀歌かな
生味噌を用ふる春の料理哉
短冊に春の句書いて破りけり
昔知る水夫に逢ひぬ春の町
手に鉄何つむ人か春の園
料理屋を兼たる春の宿屋哉
朝飯や寝過ぎて春の四ッ時分
春古りし三味線箱の題詩かな
古沼の芥に春の小魚かな

根岸名所の内

鶯横町塀に梅なく柳なし
須磨寺や春の夕雲夕嵐
大船の一間に春の樂器哉

大勢のさゝめく春の旅籠哉

礫堂子改めて極堂と云ひけるに

宿帳や春の旅人異名書く



夏之部

▲五月雨

五月雨や戸を下したる野の小店
かちわたる人流れんとす五月雨
椽側に棒ふる人や五月雨
五月雨や下駄屋の前で下駄を切る
五月雨の合羽つツばる刀かな
蝸牛の喧嘩見に出ん五月雨
五月雨の隅田見に出る戸口哉
山門や木の枝垂れて五月雨
五月雨大井の橋はなかりけり
蓮池の浮葉水こす五月雨
三井寺や湖濼々と五月雨
五月雨や壘に上る青蛙

●夏之部

首途

五月雨に菅の笠ぬく別れかな
五月雨は腹にもあるや腸かたる
折からの木曾の旅路を五月雨
棧や水へも落ちす五月雨
椎の舎の主病みたり五月雨
根たゆらく川邊の宿や五月雨
五月雨や虫落ち来る本の上
草鞋はいて傘買ふ旅の五月雨
地車の轍の跡や五月雨
五月雨や棚へとりつく物の蔓
病人に鯛の見舞や五月雨
咲き滿つる葵の花や五月雨
五月雨や上野の山も見飽きたり

弘法大師贊

▲夏の雨

龍を叱す其御吒や夏の雨

▲梅雨

梅雨淋し障子の外を鴉飛ぶ
梅雨の中人静かあり法華堂
一梅雨を羽黒にこもるひじり哉

▲五月晴

椎の木に鶯なくや五月晴
薔薇をきる鉄の音や五月晴
カナリヤの卵腐りぬ五月晴
下駄洗ふ音無川や五月晴
満園の露日に動く五月晴
早咲の朝顔赤し五月晴

▲夕立

夕立の虹こしらへよ千松島

夕立にうたる、鯉のかしら哉

夕立や殺生石のあたりより

飯坂温泉

夕立や人聲こもる温泉の煙

仙臺南山閣

夕立の見るく山を下りけり

夕立や大路へかゝる牛車

山奇なり夕立雲の立ちめくる

行水や沛然として夕立す

夕立や南を見れば雲の峯

夕立の音はかりして通りけり

夕立や蛙の面に三粒程

夕立や松とりまいて五六人

▲卯花腐

時鳥鳴かず卯の花下しつゝ

▲青嵐

岡の上に馬控へたり青あらし

文章

青嵐去來や來ると門に立つ

大佛の頭吹きけり青あらし

青嵐机上の白紙吹き盡くす

汽車見るく山を上るや青嵐

片谷へ雲吹き落せ青あらし

真帆片帆どこ迄行くぞ青嵐

▲夏の月

甲板に寝る人多し夏の月

踏曲熊坂

夏の月大長刀の光かな

鱗散る雑魚場の跡や夏の月

福岡大火

カナリヤの病みたれば

糞づまりならば卯の花下しませ

上根岸三島神社の祭禮

この祭いつも卯の花下しにて

▲薬降

薬降る園や山吹咲き残る

▲薫風

高濱海水浴

薫風や裸の上に松の影

薫風や松島の記をひるかへす

長句法

薫風吹袖釣竿擔ぐ者は我

上野東照宮

古杉や三百年の風かをる

江の島や薫風魚の新らしき

●夏之部

家の赤き人二萬人夏の月
商隊や椰子の木蔭の夏の月

▲夏 雲

夏雲や辰巳にあるを阿波太郎

▲峰の雲

雲の峯水なき川をわたりけり
雲の峰凌雲閣に井びけり
山を出てはじめて高し雲の峯
嶙の住む沼涸れて雲の峯
夕榮や月も出て居て雲の峯
雲の峯白帆南にむらがり
吊戦死者
匹夫にして神と祭られ雲の峯
籠城の水の手切れぬ雲の峯
夕風や崩れてしまふ雲の峯

▲六 月

六月の蟻ねびたし石の陰

▲水無月

本宮

水無月やこゝらあたりは鷺が

▲短 夜

短夜の明方近し雨の音
短夜のかあと明けたる鴉かな
短夜や眠たき雲のとんで行く
短夜や一寸のびる桐の苗
短夜や幽霊消えて鶏の聲
短夜の明けて論語を讀む子哉
短夜や四十にして學に志す
短夜や焼場の灰のわたまり

諷曲熊坂 二句

短夜や金商人の高軒
短夜や吉次をねらふ小盗人

淺香沼にて

短夜の雲をさまらすあたいらね
短夜や胃の腑に飯の残りたる
短夜や上野の山は明けて居る

▲明 易

明易き夜頭を桃のまだ苦し
わけやすきはしめに動く青芒
糟味噌の茄子紫にわけやすき
江樓や水の光の明けやすき

▲夏の夜

夏の夜の圃に行けば明けにけり
熊坂は逃げて夏の夜明にけり

▲暑

●夏之部

我部屋は茶代も出さぬ暑さ哉
濁世暑し和尚赤裸々所化白裸々
あら暑し波を見んとて立ち出る
瘦馬の尻並へたるあつさかな

其角

肅山の御相手暑し晝一斗
暑苦し亂れ心や雷をきく
鄙の家に赤き花さく暑さかな
暑き日や池を堀らんと思ひけり
暑き日の夕や花に灌きけり
暑き夜を籠の鴉の眠らざる
腐り居る暑中見舞の玉子哉
平内のぐるりに暑し小平内
夕顔の花にさめたる暑さ哉
新道は人も通らぬ暑さかな

▲涼

さま／＼に工風して見る暑さ哉
し

涼しさの中に火を吐く淺間哉

飯坂温泉

涼しさや瀧ほとばしる家の間

忍摺の古蹟 二句

涼しさの昔を語れ忍摺

うつぶけに涼し河原の左大臣

涼しさの動く野山のみどり哉

もの涼し春日の巫女の眼に惚れた

畫中の白雲涼し中禪寺

愚庵十二勝の内

清風園

涼風や愚庵の門は破れたり

東京山

涼しさや聞けば昔は鬼の家

黒塚

御佛に尻むけ居れば月涼し

寺に寝る身の貴さよ涼しさよ

見下せは月に涼しや四千軒

月涼し蛙の聲の湧きあかる

笛の音の涼しう更くる野路哉

涼しさや我船一つ鳩の海

業を卒へて放郷へ歸る鹿嶺君を

送りにて

涼しさや都を出つるうしろつき

桐目

涼しさや昔の人の汗のあと

十綱の橋

どこ見ても涼し神の灯佛の灯

靈巖

涼しさを四文にまけて渡舟守

松島

涼しさや島かたぶきて松一つ

涼しさや裸てこゆる箱根山

須磨の浦や松に涼しき裸蝮

三界無安猶如火宅

又けふも涼しき道へ誰か柩

長句法

修竹千竿灯もれて碁の音涼し

淺香沼

涼しさの只水くさき句ひ哉

二本松蒲福寺 三句

涼しさや神と佛のとなり同士

釣橋に亂れて涼し雨のあし

笠島道祖社

我は唯旅涼しかれと祈るなり

籠り島

涼しさのこゝを扇のかなめ哉

夕やみや涼しき花は何の草

家藏を賣て涼しき夕かな

松島 七句

涼しさの眼にちらつくや千松島

涼しさや島から島へ橋つたひ

灯ちら／＼人影涼し五大堂

涼しさのはのめく闇や千松島

涼しさを裸にしたり坐禪堂

涼しさのこゝからも眼に餘りけり

涼しさや海人か言葉も藻汐草

のぞく目に一千年の風すゝし
涼しさの果より出たり海の月
野も山もぬれて涼しき夜明哉
涼しさや行燈うつる夜の山
雲にぬれて關山越せは袖涼し
墜道のはるかに人の影涼し
涼しさを碎けて散るか瀧の玉
夕雲にちらりと涼し一つ星
涼しさや浪打際の藻汐草
涼しさや上野の見ゆる町はつれ

上野清水堂

涼しさや梅も櫻も法の風
涼しさの皆いでたちや袴能
手を當てゝ手の腹涼し鐘の疣

涼風の上野吹くらん杉動く
砂濱に雑魚うちあけて月涼し
夜も更けぬ妻も歸りぬ門涼し
涼しさや水樓を下る白拍子

▲早

海賊の村に水くむひでり哉
水草の泥に花さく早かな

▲土用

ほろ／＼と朝雨とほす土用哉

▲日盛

日盛や蚤か門邊の大碇

上野公園眺望

日盛や八百八町饅立つ

▲麥秋

兀山のてか／＼として麥の秋
行列の鎗五六本麥の秋
野の道や童蛇打つ麥の秋
麥秋や壯士村に入る仕込杖
麥の秋あから／＼と日は暮れぬ

▲夏寒

人屑の身は死にもせて夏寒し

▲炎天

上野公園

人絶て炎天の石壇かせわたる
炎天や木の影冷る石たゝみ

▲木下閣

●夏之部

御堂暗く龍の目凄し木下閣
花や旗や森の下閣棺行く

谷中

猫の塚ね傳の塚や木下閣
下閣や八丁奥に大悲閣
牛歸る木の下閣や村一つ

須磨

物凄き平家の墓や木下閣
下閣や蛇を彫りたる蛇の塚
檜賣る婆々の茶店や木下閣

黒塚

木下閣あゝら涼しや恐ろしや
木下閣電信の柱新しき

▲夏木立

坂町や家のうしろの夏木立

夏木立幻住庵はなかりけり

白河天満宮

夏木立宮ありさうなところ哉

上野公園

大佛のうしろに高し夏木立
夏木立村あるべくも見ぬ哉
鳥赤くや草屋をめくる夏木立

▲青田

巡查見わて裸子逃ける青田哉
小松植わて新道直き青田哉
横雲に朝日の洩る、青田かな
武藏野や青田の風の八百里
宙を踏む人や青田の水車
夕風の鷺吹き飛はす青田かな
流れ矢の弱りて落ちし青田哉

白雲や廣く青きは田なるべし
青田あり川あり白帆上り行く

根岸名所

青田に出で、御幸の松を見て歸る

▲清水

脛入れて短かく見ゆる清水哉
絶壁の巖をしほる清水かな
清水ありや婆子曰く茶喫し去れ
忘れても清水掬ぶな高野道
愚庵十二勝の内
碧梧井
桐掩ふ庭の清水に塵もなし
金時も熊も來てのむ清水哉
山鳥の影うつしたる清水哉
苔清水馬の口籠を外しけり

▲夏川

夏山を出て北へ行くかかれ哉
夏山を出て善光寺平かな
夏山を上り下りの七湯かな
夏川の泥に替入る、家鴨哉
夏川や小橋たわゝに水を打つ
夏川やあふれて草を流れこす
夏川や中流にしてかへり見る
ざぶと夏川わたる小荷駄哉
橋なくて人立ち戻る夏の川
夏川を渡りつれたる小荷駄哉
夏川や我れ君を負てわたるべし
夏川や橋はあれど馬水を行く
夏川のおあたに友を訪ふ日哉
すんくと夏を流すや最上川

▲夏山

はらわたも冷つく木曾の清水哉
苔ともにすくひ上たる清水哉
もどかしく片手に掬ふ清水哉
口つけて眉のぬれたる清水哉
手桶もつ人に逢ひたる清水哉
汗臭き手拭洗ふしみづ哉
酒賣の夏山こゆる車かな
夏山の雲むらくと起りけり
須磨 二句
夏山の病院高し松の中
夏山のこゝもかしこも名所か
夏山や岩あらはれて亂麻皺
夏山や湖水青く鳥赤きわたる
夏山や雲涌いて石横はる

●夏之部

▲夏野
夏川や馬つあきたる橋柱

夏野つきて道山に入る人力車
旅人の兎追ひ出す夏野かな
雷の十歩に落つる夏野哉
ちら／＼と伏勢見ゆる夏野哉
絶わす人憩ふ夏野の石一つ
低き木に馬繫きたる夏野哉

謠曲熊坂

盗人の晝も出て居る夏野哉
夏野行く人や天狗の面を負ふ
国道の普請出来たる夏野哉
かたまりて黄なる花さく夏野哉
汽車道を横切て行く夏野哉

▲夏野
衣更へて愚庵を訪はん東山

法帖の古きに臨む衣更
十年の病癒えけり衣かへ
衣更て机に向ふうつし物
人は皆衣など更へて来りけり

▲更衣

若き人の眼鏡かけたり絹裕
強弓を引しほりたる裕かな
松島の心に近き裕かな
裕着ておくれじと行くや橋供養
裕着て歸去來を賦す五人扶持

▲羅

うすものを掛けし衣桁や風渡る

▲單物

單物瓢然として郷を出づ
留別

松島の風に吹かれん單衣物
種竹山人を送る

▲幟

大風の俄かに起るのほりかな
朝嵐となりの幟建てにけり
幟立て、嵐のほしき日也けり
雨雲をさそふ嵐の幟かな
大幟百萬石の城下かな
ひるかへる鯉吹抜や遅櫻
引下ろす三筋の鯉や風やます
よしあしを育て参らすや内幟

▲浴衣

日曜や浴衣袖ひろく委蛇々々たり

▲夏羽織

此頃の會社つとめや夏羽織
江の島に遊ぶ仕度や夏羽織
脱いで置く夏の羽織や芝居茶屋
先生の夏羽織脱く揮毫かな
挨拶や夏の羽織もつくろはず
夏羽織我を離れて飛ばんとす

▲帷子

帷子や須磨は松風松の雨

●夏之部

連名の座敷職を贈りけり
五女ありて後の男や初職
山里に雲打ちはらふのほり哉

▲日傘

清水の坂のほり行く日傘哉
黒雲の俄にさわく日傘哉

▲夏帽

夏帽の人見送るや蚤か子等
潮あびる裸の上の葉帽子
夏帽の對なるをかぶり二三人
夏帽子人歸省すべきでたち哉
夏帽も取り敢へぬ辭宜の車上哉
夏帽や吹き飛はされて濛に落つ
夏帽をかぶつて來たり探訪者

▲風板

風板引け鉢植の花散る程に

註日、子規が病牀六尺七月
十九日に風板の事あり

▲蚊帳

更る夜の蚊屋泣きめくる小猫哉
明方の蚊帳外せとも舐かな

須磨

曉や白帆過ぎ行く蚊屋の外
瘡落ちて足踏伸す蚊帳哉
病む人の蚊帳にすかる起居哉
病む人の顔にかけたる蚊帳哉

惟然

晝蚊帳に乞食と見れば惟然坊
湯あみせし旅草臥や蚊屋の中
鼠入つて四隅を落す蚊帳かな

▲掛香

掛香を人に呉れけり後家の君
掛香や紅やくさく京土産
掛香や派手な浴衣の京模様
掛香やすれ違ひたる宵の闇

▲青簾

青すたれ娘をもたぬ家もあし

▲扇

物書いて扇を人に見られけり
紅扇十三にして舞をなす
赤きものを子はめで草のざつ扇
富山より松島を望む
海は扇松島は其繪ありけり
須磨にて虚子の東歸を送る
贈るべき扇も持たずうき別れ

●夏之部

▲團扇

たわれ男や扇の手わざ小さかしき
發心の歌書き捨る扇かな
松島に扇かさして眺めけり

芭蕉

鮮の句を題す鮮屋のうちは哉
川風や團扇持て人遠ありきす
團扇取て廊下舞ひ出る酒興哉
人真似の團扇をつかふ小猿哉

召波

破れうちは夏も一爐の備へ哉
村と話す維駒團扇取つて傍に

蕪村

團扇二つ角と雪とを畫きけり
古墨團扇に虫ををさへけり

▲夏 氷

一錢の氷少なき野茶屋かな
石の巻より氷漬の鯛送り
こしけるに

三尺の鯛活きてあり夏氷
遠くから見えし此松氷茶屋

▲氷菓子

一七のアイスクリームや蘇る
持ち来るアイスクリームや簀

▲ラムネ

ラムネ屋も此頃出来て別荘地

▲水 飯

水飯や京なつかしき京の水

蒲扇寺に宿る此寺にて養經の飯
を食ひたる由来あり

水飯や辨慶殿の喰ひ残し

▲新 茶

玉川の門に新茶の使かな

▲麩

はつたいや褒似笑はぬ事五年

▲葛 餅

吹出しの水葛餅を流しけり

▲一夜酒

味噌造るあまり麴や一夜酒

▲鮓

故里や親すこやかに鮓の味
山の家や留守に雲おこる鮓の石
早鮓や東海の魚脊戸の蓼
鮓鮓や瀬田の夕照三井の鐘
鮓鮓や考槃亭をかりの宿

▲沖 脛

沖脛都の鯛のくさりとき
腹わたの埃洗はん沖脛

▲あらひ

ビードロにあらひ鱧を並べけり

▲梅 干

梅干すや庭にしたゝる紫蘇の汁
梅を干す晝照草の小庭かな
梅の木に近く其木の梅を干す
梅干すや撫子弱る日の盛り

▲晝 寐

晝寐さめて湖畔の森に遊びけり
弓引きし朝の疲れの晝寐哉
竹婆娑と晝寐の床に動きけり
午飯の腹を風吹くひるねかお

内閣を辭して薩摩に晝寐哉
澁紙に澁引く人や晝寐起
茶屋女盧生の晝寐起しけり
几董
李斯傳を風吹き返す晝寐哉

愚庵和尚に寄す

靈山や晝寐の軒雲ねこる
文机に顔おし付けて晝寐哉

▲行 水

行水や盥に遊ぶ兒二人
行水の肌白うして痣を見る
宵月や黍の葉がくれ行水す
行水に夫呼ぶ脊戸の鳥かな

▲氷室守

花守と同じ男よ氷室守

氷室守花の都へと急き候

▲早乙女

夕月や早乙女唄ひつゝ歸る

早乙女のむかしを語れ小傾城

▲葵祭

祭見の物争へる舎人かな

地に落ちし葵踏み行く祭哉

子を抱いて葵祭の道の端

▲祇園會

横町や祇園祭の西瓜店

祇園會や錦の上に京の月

▲夏祭

上根岸三島神社の祭禮

不消化な料理を夏の祭り哉

▲納涼

奥の院へ十丁と記す石に涼む

寓居即事

夕納涼仲居に文字を習はする

湯上りや乳房ふかるゝ端涼み

商人やしはらく涼む橋の上

納涼舟川下遠く流れけり

三尺の木かけにすゝむ主従哉

須磨寺

二文投けて寺の椽借る納涼哉

おこし繪に燈を燈しけり夕涼み

吸殻の水に音ある納涼哉

烏帽子着て加茂の宮守涼みけり

瓜盗む事も忘れて涼みけり

山伏の笈に雲おく納涼かな

眞夜中や納涼も過ぎて浪の音

祝當選

豪い人になつた相など夕納涼

長句法

夜涼如水三味ひき止めて下り舟

陸奥へ涼みに行くや下駄はいて

飯出山

ひろしきに僧と二人の納涼哉

仙臺

月に寐ば魂松島に納涼せん

なき人を相手に語る納涼哉

松島の闇を見て居るすゝみ哉

松島

燈火の島かくれ行くすゝみ船

夜納涼や川へ落ちたる人の音

上野公園

●夏之部

晝納涼摺鉢山に腰かけて

燈をともす廻り燈籠や夕すゝみ

星の名をよく知る人や門納涼

▲避暑

避暑の地に行き逢ふ人や見知顔

▲蚊遣

夕飯や蚊遣もつるゝ箸の先

蚊遣火の灰に風あり後夜の鐘

烏帽子折

蚊遣して盗人待つや御曹子

▲照射

照射して潜み居れば虫顔に飛ぶ

▲川狩

川狩や人におどろく夜の鳥

▲舟遊

舟遊び愛宕の塔を右に見て
網の舟料理の舟や舟遊び

▲夏芝居

やぶ入の小僧むざうや夏芝居

▲打水

庭前に水打つて月山の上
打水や蘇鐵の雫松の露

▲夏瘦

夏瘦の朝飯食はぬ男かな
和歌にやせ俳句にやせぬ夏男

上野動物園

夏瘦としもなき象の姿かな

夏瘦の骨にとゝまる命哉

▲競馬

くらべ馬おくれし一騎哀れ也

蘆毛より栗毛は早し競べ馬
我前に来て見定めぬ競馬哉

▲菖蒲湯

菖蒲湯に桶の少なき風呂屋哉
とめ桶に菖蒲入れたる童哉

菖蒲湯や病おこたるかんの君
曉の菖蒲湯に入る一人かな

▲菖蒲葺

人の妻の菖蒲葺くとして階子哉
出る時の傘に落ちたる菖蒲哉
病人の寐牀にかけし菖蒲哉

▲御穧

雨雲の烏帽子に動く御穧哉

▲灌佛

つゝし多き田舎の寺や花御堂

御釋迦様の尻また青き産湯哉

▲夏籠

夏籠の吾妹も遠き嵐かな
夏にこもる黒谷邊の小寺哉

夏籠のこもりし一日二日哉

▲夏花摘

智月尼

義仲寺へ乙州連れて夏花摘

▲夏書

筆を手に夏書の人の晝寐哉
うすやうの紫ねたき夏書哉

▲夏斷

魚多き海邊の里に夏斷哉

▲煮酒

鬼賈

●夏之部

酒を煮る男も弟子も發句作り

▲土用干

土用干や裸になりて旅ころも

鎌倉展覽會

土用干うその鐘も并びけり

瑞巖寺

政宗の眼もあらん土用干

虫干に蕪村の偽筆かゝりけり

我れ書て紙魚くふ程に成に鳥

虫干のついでに見する本尊哉

土用干や軍書虫ばみて煙草の葉

▲田植

兼平の塚を目あてに田植かな

▲田草取

我先に穗に出て田草抜かれけり

▲雨 乞

月赤し雨乞踊見に行かん

▲鶉

曉や鶉籠に眠る鶉のつかれ

達磨

君來ませり月に鶉飼の暇あれや

▲老 鶯

骨折りて鳴く鶯ぞ老いたりし

上根岸三島神社の祭禮

鶯も老いて根岸のまつりかな

▲翡翠

翡翠やおのれみめよくて魚沈む

翡翠や水澄んで池の魚深し

翡翠にねらはれて居る小魚哉

かはせみの魚をうかふ柳哉

かはせみをかくす柳の茂り哉

翡翠の來る柳を愛すかな

かはせみや池をめぐりて皆柳

翡翠の來ぬ日柳のあらしかな

かはせみも鶯も來て居る柳哉

柳伐て翡翠遂に來ずなりぬ

▲水鳥巢

流さるゝ浮巢に鴉の聲悲し

水鳥に水鳥の巢は知られけり

巢立して鴉も入らさるから巢哉

▲鴨の子

鴨の子の泳きそめする濁り哉

鴨の子の羽ばたきしたる淺瀬哉

▲水 鶏

根岸閑居

かはせみの足場を選ふ柳哉

かはせみの去て柳の夕日哉

かはせみの飛でしまひし柳哉

▲時 鳥

水鶏叩き鼠答へて夜は明けぬ

叩けとて水鶏に鎖すいほり哉

時鳥癩おさまりし夜明方

鉢植の梅の實黄なり時鳥

時鳥太閤様をちらしけり

時鳥上野でぬれし人あらん

御簾に腹など見せよ杜宇

時鳥表は馬車のひゝき哉

淀川の大三日月や郭公

●夏之部

▲閑古鳥

提燈を返せ〜と杜宇

無事庵みまかりぬき開きて

時鳥辭世の一句なかりしや

時鳥千本卒塔婆宵月夜

杜宇ひよとり越を逆落し

閑古鳥

木乃伊取る人は歸らす閑古鳥
閑古鳥三個の秘事は傳絶ぬ
しんくくと泉わきけり閑子鳥

▲蝙蝠

明家の鼠蝙蝠となりけらし
蝙蝠や暮るゝを眺め坂の上

▲蚊

蚊の聲になれて遊女の眠り哉
蚊の聲もよわる小路の夜明哉
蚊の聲にランプの暗き旅籠哉
蚊を叩くいそかはしさよ寫物
蚊柱や夕榮廣き須磨の浦
書をよむや蚊に刺れたる足の裏
君侑む酒にわびしや蚊の屍
水捨つる草むらを蚊の鳴て出る

病人の起きて蚊を焼く夜半哉
我宿は椎の木深く蚊の多き
蛇脱衣
草むらやちきれくんに蛇の衣
野茨の花白うして蛇の衣

▲鼓虫

まひくは水に數書く類かな
世の中をまひく丸く廻りけり

▲蛎

飯呼べど來らず蛎の跡をかく

▲水馬

夕暮の小雨に似たり水すまし

▲蟬

晝中や蟬の集まる大榎
鳴き止めて飛ぶ時蟬の見ゆる也

▲空蟬

衣物干す上は蟬なく一の谷
ぬけ空の君の空蟬のうつなや

▲火取虫

火取虫書讀む人の罪深し

▲夏蠶

山里に夏蠶飼ふらん桑島
刈り残す一畝の桑や夏蠶

▲螢

たはれ男の袂に包むほたる哉
螢籠行燈に遠く吊しけり
葉がくれて螢飛ふなり竹の雨
手の内に螢つめたき光かき
墓原の櫛に光るほたるかな

●夏之部

上野から庭の木へ来て蟬の聲
晝中や雲いらくぞ蟬の聲
蟬の聲共に吹かるゝ梢かな
雷晴れて一樹の夕日蟬の聲
鳴きさして蟬の飛び行く夕日哉
蟬あくや行水時の豆腐賣
山深く見なれぬ花や蟬も鳴かず
大木の注連に蟬なくやしる哉
七月十五日始て蟬を聞く
蟬始て鳴く鮫釣る頃の水繪空
蟬なくや五尺に足らぬ庭の松
蟬なくや團扇に画く瀧の音
飛で来て止るや直ぐに蟬の聲
あながまの聲や手の蟬袖の蟬
人力の森にはいるや蟬時雨

▲蚤

御僧見られよ庵は大蚤大虱
蚤飛んで仲間部屋の人もなし
どこ迄も追つめて見ん船の蚤
猿芝居猿の蚤どる樂屋哉
店先や餌にあきて猿の蚤を取る

▲青 蛙

園茂み傘に飛び付く青蛙

▲蝸 牛

蝸牛や雨雲さそふ角の先
小照自題

▲夏 虫

蝸牛の頭もたげしにも似たり

▲子 子

夏虫の死んで落ちけり本の上

▲毛 虫

子子や汲で幾日の閑迦の水
子子や松葉のしづむ手水鉢
子子の蚊になる頃は文學士
子子や須磨の宿屋の手水鉢

折り捨し萩の毛虫を踏付けぬ
上野東照宮

▲墓

神前の鳥居を上る毛虫かな
人をして毛虫取らしむ庭の松
花散りし藤の若葉の毛虫哉
思はずの葉裏に居たる毛虫哉
片枝に毛虫つきたる若木哉
淺ましく松くひあらず毛虫かな
草の雨墓も主も古りにけり

▲羽 蟻

盆栽に水やり時や墓
鐵拐の噴き出したる羽蟻哉
ひら〜と蟻飛ぶ藪の小道哉

▲蠅

愛想は蠅打ちて蟻に與へけり
山寺の庫裏ものうしや蠅叩
酒臭き車夫の晝寝や蠅の中
病中

活きたる眼をつゝきに來るか蠅の飛ぶ
蠅憎し打つ氣になれば寄付かず
蠅打て暫く安し四疊半
馬蠅の我にうつるや山の道
こゝ迄は蠅居らすなりぬ馬返
三尺の鯛や蠅とぶ臺所

●夏之部

▲松 魚

曉の第一聲や松魚賣
邯鄲城南遊俠子自吟生長耶那裏
江戸子は江戸で生れて初松魚
鎌倉と名のつて死ぬる松魚かな
大松魚昔の都あれにけり
鎌倉や日蓮去つて初鯉

▲鮎

玉川の鮎に喰ひ飽く一日哉
時鳥一尺の鮎串にあり
鮎の居らぬ上總の國や鮎汁
簾まけは山みどりなり鮎脰
鮎釣てなりはいとする翁哉
一群の鮎眼を過ぎぬ水の色

▲鯰

鎌倉は松魚もなくて小鯰哉

▲牡丹

牡丹剪て二日の酔のさめにけり
かさ立てゝ雨横しゆく牡丹哉
咲きにけりから紅の大牡丹
牡丹のせて今戸へ歸る小舟哉
美服して牡丹に媚る心あり
宰相の詩會催す牡丹かな
廢苑に蜘蛛の園とづる牡丹哉
牡丹剪て其夜あらしの音す也
薄月夜牡丹の露のこほれけり
卓一脚香消なんとする牡丹哉
廊下より手燭さし出す牡丹哉

▲畫

凜として牡丹動かす眞畫中
畫中の雲かけうつる牡丹かな
篝火の燃やうつらん白牡丹
白牡丹ある夜の月に崩れたり
花震ふ大雨の中の牡丹かな
楊貴妃の寢起顔ある牡丹かな
金屏や一輪牡丹瓶の中
廢院の牡丹小さく咲きにけり
豁然と牡丹伐りたる遊女哉
しづ心牡丹崩れてしまひけり
青樓の壁に牡丹の詩を題す
猩臙脂に何ませて見む牡丹哉
薄色の牡丹久しく保ちけり
我庭に始めてさける牡丹哉

▲蓮

畫顔や安達太郎雨を催さず
畫顔の咲くや砂地の麥島
山里の桑に畫顔あはれなり
畫顔の朝から咲いて燒場哉
畫顔の花に乾くや通り雨

御門主の女俱したる蓮見哉

蓮ほのく戸未だ明けず湖心亭

古白百ヶ日

蓮咲いて百ヶ日とはなりにけり

岩切停車場

蓮の花さくやさびしき停車場

行水を捨てる小池や蓮の花

不忍辨天社

畫中の堂靜かなり蓮の花

●夏之部

▲罌粟花

田の中に蓮咲けり家二つ三つ
豆の如き燈火一つ蓮の亭
蓮見舟は蓮にかくれて翡翠飛ぶ

開いても開いても散るけしの花

芥子咲いて其日の風に散りにけり

園女

けし咲くや尋ね當たる智月庵

百姓の年々つくる芥子の花

▲卯の花

卯の花に富士を結び込む桓根哉

押し合てまた卯の花の咲こぼれ

卯の花や月夜となればこぼれ立

卯の花に泣きあかしけり尼一人

▲芍薬

芍薬の衰へてあり枕元

長壽祝

君か祝芍薬園の掃除せん
芍薬は散りて硯のほこりかな
芍薬や兵士宿かる大が籃

▲百合花

百合活けて百の歌よむ湯治哉
蛇逃けて山静かなり百合の花
用ありて在所へ行けば百合の花
六尺の百合三尺の土塀かな
姫百合や餘り短かき筒の中
百合持て來たる田舎の使哉
百合の花田舎臭を愛すかな
姫百合や日本の女丈低し
一列に十本ばかり百合の花

畑もあり百合あそび咲て鳥豊か
宣教師の妻君百合を好みけり

長句法

驟雨欲來五尺の百合を吹く嵐
面白き塀の崩れや百合の花
鄙の様家南向いて百合の花

蒲福寺

下闇にたゞ山百合の白さかな
山百合や水迸る龍の口

▲柿の花

去來

柿の花散るや仕官の暇無き

▲栗の花

栗の花落ちてきたなき小庭哉
合歡未だ覺めず栗の花旭に映す

▲紫陽花

毛虫にもならで落ちけり栗の花
大釜の湯氣立のほる栗の花
霧かゝる山の木立や栗の花
思出して又紫陽花の染め替る
扶け起す紫陽花の枝倒れけり
紫陽花や赤に化けたる雨上り
今日や剪らんあすや紫陽花何の色

▲河骨

河骨の驚きもせぬ出水かな
河骨の水を出かぬる蕾かな
河骨の蕾乏しきなかれ哉

▲藻の花

藻の花や竹伏す岸に亂れ咲く
藻の花や泥鰌浮出て、目高去る

●夏之部

▲萍

洪水圖

氣味わるく浮草からむ徒涉
家も木も皆浮草とさそはるゝ
浮草を長く手ぐるや舟の中
浮草の心中話やつゞき物

▲水草

水草の花の白さよ宵の雨
内堀に古水草の花白し

▲夏菊

夏菊に薬の露もなかりけり
夏菊に木曾の旅人瘦せにけり

▲苦の花

苦の花門に車の跡もなし

▲夕顔

夕顔や客乗せて来る女馬士
夕顔に女湯浴すあからさま

田舎傾城賛

夕顔に昔の小唄あはれなり
夕顔に都あまりの女かな
夕顔に行脚の僧をさめけり

▲薔薇

満園の緑や薔薇二三輪
枝低き朝鮮薔薇の蕾かな
遅咲きの薔薇赤うして散易き
椅子を置くや薔薇に膝のふるゝ所
薔薇を見る眼の草臥や病上り

▲綿の花

ばら深くピアノ聞ゆる薄月夜
夕風や白薔薇の花皆うごく
伐り込みしはらの蕾の多き哉
薔薇の香の紛々として眠られず

▲早苗

海近く帆の大きさよ綿の花
此の濱や此頃埋めて綿の花
小山田に早苗取る也只一人

▲早稲花

涼しさの早穂に出て、早稲の花

▲百日紅

雨乞のしるしも見えす百日紅
てらくくと百日紅の早かな

▲葵

▲椎の花

桐の花さくや都の古屋敷
馬の脊や風吹きこほす椎の花
上野公園

▲茨の花

こほるゝや日傘の上の椎の花
岩陰や水にかたよる椎の花
翳手の刎橋凄し花茨
見届けしかたきの宿や花茨
かいま見ん茨さく宿の隠し妻
茨さくや根岸の里の貸本屋
あれ家や茨花さく白の上
花茨惜むべき香を吹き棄つる

▲撫子

撫子に馬けつまづく河原哉

▲桐の花

一八の屋根並びたる小村哉

花桐の琴屋を待てば下駄屋哉

●夏之部

啼きくゝ撫子の上に倒れけり
撫子や人には見ぬ笠の内

須磨古蹟

撫子に蝶々白し誰の魂
繪屏風の撫子赤し子を思ふ

▲菖蒲

優しくもあやめ咲けり木曾の山
花菖蒲に錢取る鄙の庭構
鄙の家に翡翠来るや花菖蒲

▲燕子花

病僧や燕子花剪る手の震へ
牛飼ふや濠はうもれて杜若

▲芭蕉實

蕨海の香盤に寄す

相分れてバナ、熟する事三度

▲櫻の實

實櫻や吉野の御所に鳥の糞

▲實梅

梅の實を賣拂ひたる梅雨入哉
梅の實の落ちて乏しき老木哉
垣越に青梅盗む月夜かな
花は皆青梅にある若木哉

▲杏

愚庵十二勝の内

紅杏林

靈聖女來らす杏腐り落つ

▲橘

たち花の小窓に牛の匂ひ哉

▲林檎

赤き林檎青き林檎や卓の上
美しき籃の林檎や贈り物

▲瓜

庭しく村の芝居や瓜の皮
瓜番を化かしに来る狐かな
瓜好きの僧正山を下りけり
水清く瓜肥やし里にかくれけり
何やらの花咲きにけり瓜の皮
此村は帝國黨や瓜茄子

▲桑の實

桑の實の木曾路出づれば穂麥哉

▲茄子

茄子の藍に蔭の葉長き上荷哉
茄子汁に村の者寄る忌日哉

▲覆盆子

ほろくゝと谷にこぼるゝ莓かな

▲筍

筍のへんてつもなく伸にけり

男兒女兒並ひたる寫眞に

竹の子哉眞美人草の蕾哉
筍と笠と鍬とを画きけり
堀の上に筍見わて明屋敷
ほこら荒れて筍細し庭の隅

▲夏草

夏草や嵯峨に美人の墓多し
夏草の上に砂利しく野道哉
夏草やベースポールの人遠し
夏草にまじりて早き桔梗かき

▲草茂

園荒れたり雑草茂る中に花

墓原や墓低くして草茂る
舊道や人も通らず草茂る
燈袋に草茂りけり石燈籠
路三叉草茂りけり石地藏

▲箒木

箒木の四五本同じ形ちかな
鎌丸は箒木の舎と名りけり

▲落

枯菊の記を書きに来よふき膾

▲蓼

ことくく虫の穴ある葉蓼哉
蓼の葉や泥縮かくるこかしこ

▲麥

麥刈りて疫の流行る小村かな
麥の穂に腹こそばゆき雀哉

麥の風美濃路に馬を雇ひけり
須磨

入口に麥干す家や古簾
麥刈るや裸の上にこもひとつ
浦風に穂おそき麥のそよき哉
麥の風五月の雲雀老にけり
青梅の林見えけり麥の風
刈り残す三畝の麥や梅雨に入る
麥刈の留守を蠶飼のいそがしき
積み上げし麥葉蔭や立咄
美しき駕通りけり麥の風

▲若楓

盤臺に鯉生きたり若楓
若楓築山の亭あれにけり

▲茂

辛崎の松は片枯れ片しげり
八方へ松の茂や枝百本
蓬萊の松の茂や鶴百羽

▲芭蕉卷葉

卷葉かちに一葉ひろがる芭蕉哉
連翹は散て玉巻く芭蕉かな
二葉垂れて一葉玉巻く芭蕉哉
丸き窓に卷葉伸びたる芭蕉哉
入口や芭蕉玉巻く黄檗寺
卷葉解けて庭に塞がる芭蕉哉
十反の帆は巻いてある芭蕉哉
竿觸れて芭蕉の卷葉折らしけり
移し植て卷葉あはれむ芭蕉哉

▲若竹

若竹や豆腐一丁米二合

門を入りて木々の茂や家遠し
釣床に入日洩り来る茂かな
目印の喬木茂る小村かな
かたよりて右は箕の輪の茂哉
ところく鹿の顔出す茂り哉
墓の木は茂りぬたまや腐るらん
天狗住んで斧入らしめす木の茂
柱にもならで茂りぬ五百年
植木屋は来らず庭の茂り哉
一老樹這ひ枝茂りて下に茶屋
人住まぬ湖中の島の茂り哉
市中の山の茂りや煉瓦塔
椎の木は茂りて見えぬ上野哉
日光は杉茂り箔の光りかあ
草花を壓する木々の茂かあ

●夏之部

若竹や四五寸茂る椽の下
若竹や髪刈らしむる庭の倚子

▲若葉

きら／＼と若葉に光る午時の風
天窓の若葉日のさすうかひ哉
曉の山は若葉の匂ひかな
傘たゝむ立關深き若葉かな
瀛車過ぎて烟うづまく若葉哉

田岡綱勝氏の津山へ

行くを送る

心安し若葉の風に瀛車が行く
脊戸山に白雲わたる若葉哉
たのもしくのひる柏の若葉哉
若葉して烟のたゝぬ皆かな
三千の兵たてこもる若葉哉

見上れば信濃につゝく若葉哉

木曾山中

白雲や若葉青葉の三十里
燈のともる片側町の若葉哉

▲夏柳

夏柳家鴨養ふ小家かな
葉柳や病の窓の夕なかも

上野廣小路

車道狭く埃捲くなり夏柳
拳を打つ二階の影や夏柳

▲常磐木の落葉

常磐木の落葉掃きたる茶の日哉

▲松落葉

下駄て上る宮の廊下や散松葉
砂白く松の落葉や算ふべし

▲麻

麻刈りて鳥海山に雲もなし
日の入や麻刈るあとの通り雨
夕暮や必ず麻の一あらし

須磨保養院

人もなし木陰の倚子の散松葉

風に散るや只古松葉青松葉

松葉散る松のみどりの伸にけり
鉢に植わし二尺の松の落葉哉

▲青芒

青芒三尺にして亂れけり

▲夏葱

夏葱に鶏さくや山の宿

▲夏蕨

鳥鳴いて谷静かなり夏蕨

●夏之部

▲夏雑

白河を越ゆるや夏の小商人
夏館異人住むかや赤い花
虫のつく夏萩の芽を剪捨てぬ
渾沌の中にもものあり五月富士
六月の雲くづれけり妙義山

秋之部

▲月

一行に繪かきも交る月見かな

待戀

月に來よと只去氣なく書送る

愚庵十二勝の内

嘯月壇

嘯けは月あらはるゝ山の
上
月一輪星無數空みどりなり
やみにある觀月會の手紙哉
木犀の香や明月はくもりけり
寺に待つ觀月會の車かな
雨多き年や月見も雨にして
句を案す布團の中や月の雨

達磨の發

八四

兎角して九年の月見友もなし
名月や真向に立ちし鹿の形
傘張の願も同じ今日の月
珍らしや初めて見たる月の富士

議論

聾の一人月にぞ向ひける
名月やます穂の薄風もさし
月高く木にあり下は水の音
杉暗し月にこぼるゝ井戸の水
藍色の海の上なり須磨の月
月の根岸關の上野や別れ道
山既に月をはくへき景色哉
山寺や松許りなる庭の月
野の中や只一本の杉の月

荒野原

荒野原の香と月よりみよる

御寺より月見の芋をもらひけり
明月の豆盗人を照しけり

日蝕 二句

日と月と重なり合ふ晝暗し
日蝕に満月の裏を見られける

進軍歌

進めく角一聲月上りけり
野に山に進むや月の三萬騎

凱歌

月千里馬上に小手をかさしけり
砲止んで月脛し山の上
名月や枝豆の林酒の池
船を出て月に散歩す遊女町
名月や白き鳥とぶ海の上
流車の窓にさし込む須磨の月夜哉

●秋之部

名月や野に面す樓の謠會

笛の音や遠くに見ゆる月の人
笛賣の笛吹く月の夜店かな
椽側の芋に湯氣立つ月夜哉
芒生け芋盛りて月未だ出でず
月の雨團子を喰ふて將禁かな

▲盆の月

穢多村や犬の皮剥く盆の月

▲星月夜

紅の燈火高し星月夜
何もなき島をありく星月夜
首出すや夜舟の窓の星月夜
星月夜一つも星の飛はぬかな
三尺の庭へ出て見つ星月夜
古庭の白菊白し星月夜

柁取に海の名問ふや星月夜
舟過ぐる水の光や星月夜
禪寺の門を出つれば星月夜
星月夜星を見に行く岡の茶屋
木によれば枝葉疎らに星月夜
ちよぼくくと黒きは村か星月夜

▲二日月

あら海や二日の月を捲いて去る
生れてすく子を失ひたる人に

▲三日月

所化二人鐘撞き習ふ三日の月
日蝕の三日月程に残りけり
妙義峨々と聳わて三日の月細し

▲五日月

竹を伐つて稻妻近き夜となりぬ
稻光り芒の上を走りけり
稻妻や足場かけたる藏の間
町を出て稻妻廣し森の上
稻妻のする時雲のかたちかな
稻妻のひらめく水の映り哉
稻妻の遠くに光る月夜哉
稻妻の木かくれなりぬ森に入る
稻妻の世を觀すらし大佛
稻妻や一本杉の右左
稻妻や飛魚飛んで海くらし
稻妻や燈臺番の妻一人
稻妻に露のちる間もなかりけり
稻妻や森のすき間に水を見たり
稻妻の雲をはなれぬ月夜哉

●秋之部

即事

妹の歸るねそさよ五日月

▲待宵

待宵の晴れ過ぎて扱あした哉

▲十六夜

明月も十六夜も皆雨にして

▲後の月

後の月つくねんとして庵にあり
後の月薄の白髪けづりあへず
枝豆は食ひけり月は見ざりけり
枝豆の売捨てに出る月夜哉
仲秋の韻をたゝむや後の月
枝豆や月は絲瓜の棚にあり

▲稻妻

夜や更けん稻妻白き森の隙

稻妻や横幅廣く折れて出る
稻妻や獄門の首我を見る
稻妻や三井から見れば瀬田の上
稻妻や壘の底の忘れ水
稻妻の蚊屋をすかして黄色也
稻妻や狸のふくり牛の角
稻妻に金屏たゝむ夕かな

▲天の川

天の川敵陳下に見ゆるかな

湯田温泉

山の温泉や裸の上の天の川
桑名より宮へ七里や天の川
卷き落す浪のかしらや天の川
海原や空をはなるゝ天の川
野の宮やものはなれて天の川

膳所越わて湖水に落ぬ天の川
北國の庇は長し天の川
天の川山なき國の眞上か
夜涼如水天の川邊の星一つ
三尺の幅とこそ見れ天の川
行きくゞて左になりぬ天の川

▲秋の空

大水の引て雨なし秋の空
椎の木を伐り倒しけり秋の空
秋の空青菜車のつゞきけり
秋の空凌雲閣に人見ゆる
秋の空露をためたる青さ哉
舟もなき川の廣さや秋の空
賜よりも鳶よりも高し秋の空
秋の空清水流るゝ思ひあり

▲秋の雲
秋の空雲重つて暮れにけり

秋の雲瀧をはなれて山の上
砂の如き雲流れ行く朝の秋

▲秋晴

秋晴るゝ松の梢や鷺白し
秋はれてものゝ煙の空に入る
秋晴て敷浪雲の平なり
鳥海にかたまる雲や秋日和
軍艦を見に行く人や秋日和
時雨に遠く小春に近く秋はれぬ
秋晴れて遠足の人蟻の如し
病人の駕で遊ぶや秋の晴
秋晴れて青く小き筑波かな
秋高く象潟はれて鶴一羽

▲野分

秋はれて埃のやうき虫のとぶ
心細く野分のつもの日暮かな
三日月の吹き取られたる野分哉
見に行くや野分のおこの百花園
杉の木のためみ見て居る野分哉
塀こけて家あらわある野分哉
人がやくゝ土塀を起す野分哉
鶏頭は杖を力に野分かな
芒伏し萩折れ野分止みにけり
銀杏の青葉吹き散る野分哉
此野分更に止むべくもなかりけり
野分して上野の鳶の庭に来る
野分の夜書讀む心定まらず
雲ちぎれ雲とび野分雨もふらず

▲初嵐

一輪の薔薇吹き散りぬ初嵐

▲秋日影

大根の二葉に秋の日さし哉
西へまはる秋の日影や絲瓜棚

▲秋 雨

杉くらく鴉なくなり秋の雨
秋雨や水さびのたまる庭の池
色さめし秋海棠や秋の雨
長眠十二時間

晝までも灯のともりけり秋の雨

▲秋 風

旅の旅のその又旅の秋の風
そよ／＼と入日の面を秋の風
秋風に櫻さくあり法華經寺
馬下りて川の名問へは秋の風
絶戀
讀み返す文の中より秋の風

道後公園

水草の花また白し秋の風
秋風や侍町は塀ばかり

貧家の圖に

泣く母も笑ふ其子も秋の風

日蝕

お日様を蟲か喰ひけり秋の風

青樓

骸骨と我には見えて秋の風

水澤を出て東京に向ふ

背に吹くや五十四郡の秋の風
秋風や旅のうき世の果知らず
秋風や小牛ひきこむ家二軒
秋風や生きて相見る汝と我
大佛の大きき知れず秋の風

須磨寺

秋風も平家弔ふ經の聲

▲霧

山霧の奥も知られず鳥の聲
旅籠屋や霧晴れて窓に富士高し
廻廊やきりふきめぐる嚴島
樵夫二人だまつて霧を現るゝ
朝霧や起きて飯たく弟子大工
霧はるゝ田の面や鷺に旭の當る
見ゆるべき御鼻もきりの十八里

木曾川

朝きりや四十八瀧下り船
山檜にあさきりかゝる峠かな
茶屋あらはに燈火立つや霧の中
朝きりの雫する也大師堂

絲瓜ぶらり夕顔だらり秋の風
夕顔のふとり過ぎたり秋の風
町川にぼら釣る人や秋の風

題拂子

馬の尾に佛性ありや秋の風
人間はゝまだ生きて居る秋の風
秋風や糸瓜の花を吹き落とす
生き残る藪蚊するどし秋の風
淋しさを嵐のあとの秋の風
さらば君明日はいつくの秋の風

詩竹山人の松島行を送る

歌は古し詩で白河の秋の風
秋風や覺束なくも杜宇
秋風やつるりとしたる富士の山
何とせん母やせ玉ふ秋の風

●秋之部

くさび打つ音の高さよ霧の中
夜霧こめて赤き灯見ゆる廊哉
北海や日蝕見えず晝の霧
霧はれて雲とぶ山のくぼみ哉

▲霧

白露の三河島村燈ちらく
顔見わて野武士火を焚く露の中
藁沓や庭に山路のつゆを印す

草庵

一舛の露をたふふる小庭哉

賀仕官

雲の上露の世界を忘るゝあ

春日社

灯ともすや露のしたゝる石燈籠
植木屋の夜店の跡や道の露

草の露馬も夜討の仕度哉
草むらや露あたゝかに温泉の流れ
大佛も鐘もぬれたり森の露
草の露夜舟をあかる草履哉
獵人も犬もぬれたり草の露
白つゆの中にぼつかり夜の山

丁堂和尚より南岳の百花

繪巻を贈られて

草花帖我に露ちる思ひあり
白露に家四五軒の小村かな
蓬生や我頬走るつゆの玉
風吹いて京も露けき夜也けり
露夜毎殺生石を洗ひけり
富士は雲露に明行く裾野哉
曉の骨に露置く焼場かな

馬の尾の露をはね行く野道哉

▲初秋

初秋や合歡の葉越しの流れ星
来る秋や昔に近き須磨の浦
秋來ぬと柱の拂子動きけり

須磨

秋立ては淋し立たねは暑苦し
秋立つ日鳥に魚を取られけり
草花を畫く日課や秋に入る

最上川

秋立や出羽商人のもやひ船

王子権現

初秋の石段高し杉木立

●秋之部

秋もはや鹽煮餅に澁茶かな
秋立つと夏嫌ひの人申しけり

▲今朝秋

今朝の秋昨日の物をとられけり

▲二百十日

日の照りて風吹く二百十日哉
稻正に二百十日の花くもり
こけもせて二百十日の鶏頭哉
わが脊戸に二百十日の茄子哉
芒の穂二百十日も過ぎにけり

▲秋

秋冴たり我鯉きらん水の色

▲秋

澄
秋すむや貝鐘響く峰の雲
秋すみたり魚水中に浮て底の影

▲秋の夕

響なり秋の夕のわたし守
婆々か来て燈す秋の夕かな
夕飯の灯をさもしけり寺の秋

王子

杉高く秋の夕日の茶店かな
水流れ雲行く暮の夕哉

▲秋の暮

山門をぎいさ鎖すや秋の暮
看經や鉦はやめたる秋の暮

留別

十一人一人にありて秋の暮
女郎買を止めて此頃秋の暮
藪寺の釣鐘もなし秋の暮
大佛を見て鹿を見て秋暮る

▲秋の夜

順禮は花のうてなと歌ひけり秋の暮
まゝ事の相手に秋の日暮たり
思ひ切つて見れば見る程秋の暮
古里や都見て来て秋の暮

燈火漸可親

猿篋の秋の部あけて讀む夜哉
秋の夜や狼煙受つぐ餘所の山

▲夜長

長き夜や人灯を取て庭を行く

猫に紙袋を冠せたる畫に

何笑ふ聲ぞ夜長の臺所
長き夜や千年の後を考へる
長き夜の白髪の生る思あり
長き夜を何に更すと岡の家

長き夜を月とる猿の思案哉
長き夜や堀川落つる汐の音
俳諧に故人を憶ふ夜長かあ
瀛車過る跡を根岸の夜ぞ長き

悼

長き夜や思ひ出す時風か吹く
一日の日記しるして夜長かな
異見濟んで子の立ち去りし夜長哉
木枕に惟然なく夜の長さ哉
長き夜や障子の外をさもし行く
病人のうまゐして居る夜長かな
長き夜や孔明死する三國志
長き夜や僧となるへき物思ひ

▲残暑

蟬ないて残暑の頭裂くる思ひ

●秋之部

▲漸寒

据風呂に残暑の垢のたまり息
砂濱や残る暑さをほのめかす
神鳴の鳴れとも秋の暑さ哉
栗出来ぬ年は五穀豊饒なりさかや
糸瓜には可も不可もなき残暑哉
病人に八十五度の残暑かな

日蝕

日の神も御病氣とやら此残暑
晝過の町や残暑の肴賣
晝門を鎖す残暑の裸かな
紫茉莉の花に残暑の日影哉
松風の價をねさる残暑哉
やゝ寒み灯に寄る虫もなかりけり
漸寒み机に向ふ脊ぐゝまり

漸寒みちりけ打たする温泉哉
や、寒み襟を正して坐りけり

送別

や、寒く手を握り合ふ別れ哉

▲肌 寒

肌寒み三十棒を喰ひけり
はたさむや馬の嘶く屋根の上
肌寒や湯ぬるうして人こぞる
肌寒み紅みさむる襦袢哉

布袋の眠りたる畫に

風引くな肌寒頃の臍の穴
肌寒み寝ぬ終夜や温泉の匂ひ

▲うそ寒

ひらりしやらり一ッ葉おれてうそ寒し
うそ寒や綿入着たる小大名

▲朝 寒

朝寒や大魚動かす淵の底
水瓶に茶碗落すや朝寒み
朝寒や鼻血れさへし旅の人
朝寒の笹原走る兎かな
朝寒や紫の雲消えて行く

正宗寺一宿を訪ふ

朝寒やたのもと響く内立關
干瓢のはたへうつくし朝寒み
瘦骨をさする朝寒夜寒かな

▲夜 寒

小坊主の一人鐘つく夜寒哉
腹にひく夜寒の鐘や法隆寺
夜さむさや家なき原に燈のともる
大寺のともし少あき夜寒哉

刀物置いて盗人防く夜寒哉
鼠狩れば鼠の笑ふ夜寒かな

露月軒

牧師一人信者四五人の夜寒哉
三厘の風呂で風引く夜寒かな
松明に落武者探す夜寒哉
首途の用意して寝る夜寒哉
油さしに禿時問ふよさむかな
地震して温泉涸れし町の夜寒哉
蜘蛛殺すあとの淋しき夜寒かな
ねもてから見るや夜寒の最合風呂

須磨

蕎麥はあれど夜寒の温飽きこしめせ
須磨寺の門を過ぎ行く夜寒哉

奈良角定にて

大佛の足もとに寝る夜寒哉
出女か風ひき聲の夜寒かな
勤行のすんで灯を消す夜寒哉

●秋之部

夜寒さや人静まりて海の音
だまされてわるい宿とる夜寒哉
鼻たれの兄と呼はる、夜寒哉
母と二人妹を待つ夜寒かな
虫の音の少あくありし夜寒哉
吉原の仁輪加過きたる夜寒哉
化けさうな行燈に寺の夜寒哉
流車に寝て須磨の風ひく夜寒哉
船に寝て行李を枕の夜寒かな
盗人を柱に縛す夜さむ哉
盗人の足跡に燭す夜寒かな
狼の人食ひに出る夜寒哉

▲秋 寒

澁柿は澁にとられて秋寒し
秋寒し眼の光る鬼女の面

▲冷 か

家康の魂ひやゝかに杉木立
曉の冷かな雲流れけり
尻のあとの最う冷かに古壘

▲冬 近

我庵は蚊屋に別れて冬近し
冬近し今年は髯を蓄へし

▲冬 待

羽袴五徳なき盡きたるに

冬待つや寂然として四疊半
冬待つやつは者どもの皮衣

▲九月盡

▲行 秋

易を點して免の卦に至り九月盡
晝中や石に虫なく九月盡

行秋の鴉もとんでしまひけり
月もあり黄菊白菊暮るゝ秋
行秋を時雨かけたり法隆寺
行く秋の鐘つき料をとりに来る
秋行くと砂糖木畑の荒れにけり
行秋の我に神なし佛なし
行秋を佛手柑の只一つ哉
行秋のふしゝいたむ旅寝哉
行秋の野菊白くも咲きけらし

▲秋の山

▲秋の海

山門を出て下りけり秋の山
面白やどの橋からも秋の不二
秋は山は晝は白壁夜は燈
大方はすゝき也けり秋の山
高樓や我を取巻く秋の山
行先のはつきり遠し秋の富士
道盡きて雲起りけり秋の山

出羽

ながゝと安房の岬や秋の海
秋高う入海はれて鶴一羽
夕陽に馬洗ひけり秋の海
秋の海名もなき島のあらはるゝ
大岩の穴より見ゆる秋の海
秋の海我船近き岩に鳥

●秋之部

▲初 汐

底見わてうろくづ居らす秋の海
那古寺の椽の下より秋の海
秋の海渺々として島孤なり
門を出て十歩に秋の海廣し

▲秋の水

初汐やはかあきものはうつせ貝
初汐や埠頭の内なる蒸氣船
初汐に松四五本の小島哉
初汐や海ゆりこして草の上
初汐や川にたゞよふ薦包
初汐の上に灯ともす小島かな
翡翠の來らすなりぬ秋の水
秋の水石白く魚動かさる
日蝕や蓋をして置く秋の水

鱖鯨浮いて鯉深く沈む秋の水
静かさに礫うちけり秋の水
石塔の沈めるも見ぬ秋の水
日蝕のうつりてすごし秋の水
南泉の猫斬り捨てし秋の水

▲後藪入

藪入や皆見覺々の木槿垣

▲踊

雷のあとを淋しき踊かな
踊りけり腰にぶらつく奉賀帳
なまくさき漁村の月の躍哉
雨雲の月をかすめし踊哉

▲角力

大關にならで老いぬる角力哉
大關と大關と組む角力かな
幾秋を負けて老いぬる角力哉
角力取に角力取の子もなかりけり
まはし付て子供角力の并びけり
角力取の見て居る辻の角力哉
番附に最負相撲を評しけり
憎まれて見にくき顔や角力取
四ツに組んでひいきの多き相撲哉
相撲取小さき妻をもちてけり
幕の内になつて故郷に歸りけり
阿波人は阿波の相撲を最負哉

▲花火

兩國の花火聞ゆる月夜かな
木の末に遠くの花火開きけり

▲彼岸

夕飯や花火聞ゆる川ひらき
警察の船も漕ぎ行く花火哉
富士見わて物うき晝の花火哉

▲攝待

御萩配る彼岸の使行き逢ひぬ
梨子腹も牡丹餅腹も彼岸哉
餅の名や秋の彼岸は萩にこそ

▲墓参

攝待の施主や佛屋善右工門
攝待や芝居のやうな子順禮
攝待の札所や札の打ち納

▲燈籠

家族従者十人はかり墓参
垣こしに見ゆる隣の燈籠哉

たをやめの足元くらき燈籠哉
燈籠をともして留守の小家哉
日の入るや星のあたりの高燈籠
燈籠提けて橋行く人や水の影
亡き妻や燈籠の陰に裾をつかむ
燈籠二つかけて淋しき大家哉
朝顔の彩色うすき燈籠哉
夜更けて施餓鬼の燈籠流しけり

賀卒業

燈籠の主か達者で居られたら
燈籠を得値切らぬもあはれなり
しよんぼりと燈籠白し草の奥
瘦村のひつそりととして高燈籠
家のうちに切籠をともす嵐哉
吉原の燈籠見に寄る酒の酔

里川や燈籠さけてわたる人
淋しさは燈籠かけたる二階哉
灯や消ぬし雲やかゝりし高燈籠

▲走馬燈

同じ事を廻り燈籠の廻りけり

▲盆 蘭

石摺をかけて盆蘭の花黄なり

盆過の月明かに雨の音

▲魂 祭

聖靈の寫真に憑るや二三日

魂棚の飯に露おく夕かな

草の戸や月明かに魂祭

▲生身魂

生身魂七十と申し達者なり

▲迎 火

迎火や墓は故郷家は旅
撫子に迎火うつる小庭かな

▲棚 經

棚經や小僧面白さうに讀む

▲草 市

草市の價安くてあはれなり

草市や燈籠白き夕間暮

草市の草しほみたる日向哉

草市の中を葬禮通りけり

草市や柳の下の燈籠店

草市の蓮にたまる埃かな

草市の草の匂ひや廣小路

草市や雨にぬれたる蓮の花

草市や人まばらなる宵の雨

賣れ残る菘は露あり草の市

▲七 夕

七夕は齋の聲にて明けにけり

七夕やそこらにあるは禿星

七夕の橋やくづれてあく鴉

▲星 合

星合は月落ち鳥鳴いて夜半

▲星 別

曉のしつかに星のわかれ哉

もふくくと牛なく星の別れ哉

▲鵲 橋

橋もなし鵲とんで仕舞ひけり

▲神田祭

拾團扇風と化じけり樽天王

▲秋 祭

牛蒡肥て鎮守の祭近つきぬ

一日の秋にきやかに祭かな
祭見に狐も尾花かさし來よ

▲机、硯洗

門川や机洗ふ子五六人

洗ひたる机洗ひたる硯かな

物洗ふ七夕川のさわきかな

十年の硯洗ふ事もあかりけり

▲施 餓鬼

水の音施餓鬼涼しき燈影哉

朝顔の盛り過ぎたる施餓鬼哉

施餓鬼舟はや龍王も浮ふへし

門前の川に灯ともす施餓鬼哉

松山木屋町法界寺

▲齋施餓鬼

餓鬼も食へ間の夜中の齋汁

▲栗飯

栗飯や絲瓜の花の黄なるあり

新曆重陽

栗飯の四椀と書きし日記哉
主病む絲瓜の宿や栗の飯
栗飯や病人なから大喰ひ

▲柚味噌

我ねぶり彼嘗る柚味噌一つ哉
小僧已に柚味噌の底を叩きけり
柚子の玉味噌の火燗を吐かんとす
木守りの終に柚味噌とならん哉
六句目にさし合のある柚味噌哉
赤菊を添へて柚味噌の贈り物
膳もなき壘の上の柚味噌かな
釜焦ける柚の上味噌冷たかり

▲新酒

鴛鼻の空腹にのむ新酒かな
馬叱る新酒の酔や頰冠り
狐あいて新酒の酔のさめにけり
君今來ん新酒の燗のわき上る
中山の蕎麥屋にて
新酒酌むは中山寺の僧ともか
新酒賣る亭主の髯や水滸傳
悪僧の評議をこらす新酒哉
酒の新ならんよりは蕎麥の新なれ

▲捨團扇

白頭の吟を書きけり捨うちば
美人の團扇持たる圖

絹團扇それさへ秋となりけり

▲捨一扇

發心の歌書き捨つる扇かき

▲秋蚊帳

病人の息たわく／＼に秋の蚊屋
筆も墨も洩瓶も内に秋の蚊屋
二つ三つ蚊の來る幘の別れ哉
蚊屋釣らで画美人見ゆる夜寒哉
寢所をかへたる蚊屋の別れ哉
日三竿主か寝たる秋の蚊屋
裏店の貧亡見ゆる秋の蚊屋

▲礎

●秋之部

▲鳴子

説教に行かで嬌の礎打つ
人遅し砧うたうよ更かさうよ
打ちやみつ打ちつ礎に恨あり
玉川や夜毎の月に砧うつ
小博奕にまけて戻れば砧かな
嫁入りて餘所の砧ぞ打にくき
遠方の子を思ひ／＼礎うつ
手拭に紅葉打出すきぬた哉
里の月砧打つへく夜はなりぬ
星ちるや多摩の里人砧うつ
鳴子なくて鳥飛びぬ敵隠れたり
あれよ／＼鳴子に鳥の飛ふ事よ
淋しさにうつむいて曳く鳴子哉
思ひ出し／＼曳くなる子哉

▲案山子

其中にもつとも愚なる案山子哉
兼平の塚を案山子の矢先かな
大水を踏こたへたる案山子哉
どう見ても案山子に耳はなかりけり

自慙

十年の狂態今に案山子哉
乞食の夢に案山子となりにけり

▲鳩吹

鳩吹や寺領の畑の柿林
鳩の飛ぶ方に鳩吹く聲遠し
鳩吹の貪しき里を通りけり

▲鹿笛

鹿笛や鹿走り行く葛の風
鹿笛の止みけりやかて銃の音

鹿ないて又鹿笛を吹き出しぬ

鹿笛の吹き止で人あらはるゝ

鹿笛にこたへて鹿の遠音哉

鹿聞きに来て鹿笛を聞く夜哉

▲茸狩

茸狩や鳥啼いて女淋しがる
茸狩や淺き山々女つれ
我聲の風にありけり木の子狩

▲木賊刈

笠一つうこいて行くや木賊刈

▲木綿取

洪水のあとに收るべき綿もなし

▲田刈

股引の女稻刈る水ふかみ
脛に立つ水田の晩稻刈る日哉

稻刈るや焼場の畑たゞぬ日に
晩稻刈る東海道の日和かな
稻刈るは父扱くは母這ふは子よ
稻蒔りて野菊淋しき小道哉

▲稻扱

街道を尻に稻こく女かな

▲落水

晩稻田も水を落して仕舞けり
日焼田や二反はからき落水
千町田や夕静かにおとし水

▲虫送

虫送る松火森にかくれたり

絲付て振廻はさるゝ蜻蛉かな
赤蜻蛉築波に雲もなかりけり
番兵にとまらんとする蜻蛉哉
蜻蛉や追ひ付き兼ぬる下り船
蜻蛉の羽にかゝやく夕日哉
蜻蛉の眠られもせぬ眼玉哉
菊の枝蜻蛉のとまる所なり

▲秋

蟬木

一日一日思ひ迫るか秋の蟬
死かけて尙やかまましき秋の蟬
あながまな死ぞこないの秋の蟬
秋の蟬椎伐らばやと思ふかな
病牀のうめきに和して秋の蟬

▲蛇入穴

蛇穴に入るや彼岸の鐘か鳴る

▲蜻蛉

●秋之部

蛇の入りし榎の穴を塞きけり
洪水の來らんとして蛇穴に入る
蛇穴に入る時曼珠沙華赤し

▲鼈馬

夜嵐や黒木崩れて鳴く鼈馬

▲蝨

餘所の田へ蝨のうつる日和哉
刈株に蝨老い行く日數かな
稻刈りて水に飛び込む蝨かな
稻刈りてにぶくなりたる蝨哉
我袖に来てはね返るいなこ哉
ばら／＼と涼車に驚く蝨哉
飛び付て蝨を落す蛙かな
低く飛ぶ畔の蝨や日の弱り
蝨取る人にさびつくいなこ哉

▲河鹿

稻刈るやいさこ飛込む野の茶店
獺にふみつけられて河鹿なく
笠を手に急ぐ夕や河鹿なく

▲秋の蠅

秋の蠅追へば又來る叩けは死ぬ
黒澤尻にて

秋の蠅二尺のうちを立去らす
濕氣多く汗ばむ日也秋の蠅
秋の蠅殺せども猶盡きぬかき
欲睡

▲秋の蝶

秋の蠅叩き殺せと命じけり
秋の蠅叩き皆破れたり
病室や窓あたゝかに秋の蠅

身の果を蟻の餌食と秋の蝶
秋の蝶の長柄の傘にさまりけり
馬糞に息つく秋の胡蝶かな

▲秋の蚊

一夜二夜秋の蚊居らすなりに息
秋の蚊やともし火暗き棺の前
残る蚊や飄々として飛んで來る
秋の蚊のよろ／＼と來て人を刺す
病室に蚊屋の寒さや蚊の名残
瘦孱に秋の蚊とまる憎さかな
秋の蚊の人見て出るよ亂塔塙
秋の蚊や秋海棠を鳴いて出る
秋の蚊の泣聲細し古卒塔婆

▲秋の螢

枯柴にくひ入る秋のほたる哉

▲蟪蛄

消もせで悲しき秋の螢かな
蟪蛄の不覺をとりし最後かな
蟪蛄や蟹の味方にも参りあはず
蟪蛄のすぐに鎌ふる卑怯かな
執念や蟪蛄ふめば腹の虫
蟪蛄や油とらるゝ身の終り

▲蟋蟀

夕露や大砲冷わてきり／＼す
筑伏せて置けば晝か／＼蟋蟀
山添や帽子の端にきり／＼す
夜更けて米とぐ音やきり／＼す
消わんとしてともし火青し蟋蟀
乞食の臍になきけりきり／＼す

▲蛙

痺やもの音絶し臺所

▲蟪 蛄

蟪蛄明日なき様に鳴にけり
蟪蛄つくくはうし許りなり
蟪蛄雨の日和の嫌ひなし
家を遶りてつくくはうし櫺林
夕飯や蟪蛄やかましき

▲松 蟲

松蟲や露にぬれたる絹うちは
人は寝て籠の松蟲なき出でぬ

▲蟲

くらがりの渺茫として蟲の聲
蟲籠やこちらで鳴けばあちらでも
蟲賣や聲かしましき市の月
竹垣の外は上野や蟲の聲

夜涼如水書燈に迫る蟲の聲

さまゝの蟲のなく夜とありにけり
細霧の影襖にあり

つくく〜と我影見るや蟲の聲
蟲聞く可く茲に亭あり岡の上
笠塚や晝の蟲なく石の下
蟲の聲滋し歌よみならは歌よまん

隣家に八石教會と云ふあり

八石の拍子木なるや蟲の聲
窓の灯の草にうつりて蟲の聲

▲蚯蚓鳴

蚯蚓なくや土の達磨は元の土
童子呼へは答なし只蚯蚓なく
蛙鳴蟬噪も一時と蚯蚓なく

▲寢 蟲 鳴

▲馬 追

馬追の長き髯振るランプかな
馬追のこほろぎを追ふ聲す也
馬追や簪店の夜の雨

▲蝸

蝸は鳴けど聲の親爺かあ

清川

蝸の二十五年もむかし哉
蝸や夕日の里は見えなから
日暮や夕日の窓に櫺の影
蝸の茶屋静かなる木の間哉
蝸や神鳴はれて又夕日
蝸や旅籠もすなる一軒家

◎秋之部

▲鴨

蝸や上野の茶店灯のともる
書に倦むや蝸ないて飯をそし
蝸や机を歴す椎の影

○立ては淋し立たねは淋し鴨一つ

鴨立てあとに物なき入日哉
勅選に漏れてや鴨の尙さびし

鴨の小包到着、三羽ひさく〜リ
にしてあり

▲雁

淋しさの三羽減りけり鴨の秋
鴨黒く富士紫の夕かあ
雁赤くや巖にしろき夜の浪
汽車道に低く雁とふ月夜哉
月の出や皆首たる、小田の雁

我なりを見かけて鶉のなくらしき
三島神社

額けは鶉なくやどこでやら

▲色鳥

色鳥の聲を揃へてわたるげな

▲鶉

野に近き根岸の庭や百舌鳥落し

時を出て餌につく百舌鳥の囀哉

鶉なくや一番高い木の先に

鶉なくや雑木の中の古社

鶉鳴くや十日の雨の晴際を

鶉なくや藪のうしろの蕎麥畑

鶉鳴くや晚稻掛けたる大師道

鶉ないて妙義赤城の日和かな

演習の野中の杉や百舌鳥の聲

▲鶉

雁の聲運ことく破れたり
雁低く芒の上をわたりけり
雨となりぬ雁聲昨夜低かりし
縫物や灯をかきたつる雁の聲
人を送りて歸るはしけや雁の聲
田の泥に雁の足跡のこりけり
聞きやるや聞に押行く雁の聲

▲啄木鳥

粟の穂に鶉かくれて見ぬすなりぬ
粟の穂に富士はかくれて鶉鳴く
木のうろに隠れ失せけり啄木鳥

▲鶉

鶉や晝の朝顔花細し
箱根山

秋分の日はしめて鶉の聲を

聞きて

鶉の晝蟬の夜と分れけり

杳の代はたられて鶉の聲悲し

馬士去て鶉鳴て土手の淋しさよ

鶉なくや朝顔赤き花のひとつ

鶉啼て北海の林檎到來す

稲かけし榛の梢や鶉の聲

▲目白

南天の實をこほしたる目白哉

誰やらか口眞似すれば目白鳴

朝鳥の来れば嬉しき日和哉

▲鶉

淵静かに鶉鶉の尾の動きけり

籠頼の墓に笠をさへけて

鶉鶉よ此の笠たたく事かかれ

鶉鶉や浪うちかけし岩の上

▲四十雀

かつ散らす庭の紅葉や四十雀

▲稻雀

稻雀稻を逐はれて唐稻へ

一反は刈残す田の雀かな

▲雀爲蛤

糊甜めて蛤にゐる雀かな

鳥さしの蛤うりにありもせて

雀蛤になり藤太籠宮より歸る

舌切られて雀蛤とあらん思ひ

成佛の蛤とある雀かな

稻雀案山子に射られ海に入る

▲鹿

旅人や鹿追ひありく春日山
宮嶋の神殿はしる小鹿哉
神に灯をあけて戻れば鹿の聲
鹿の聲鹿や見ゆると戸を明る
芋堀らんと行けは雄鹿に出逢けり
鹿なくや杉の梢の二十日月
二三匹鹿なく月の木の間かな
旅籠屋の厠に鹿をきく夜哉
二三匹鹿の立つたる刈田哉
萩に寝て月見上げたる小鹿哉
鹿の首ねちれて細き月夜哉

▲落

落鮎の三の瀬あたり人網す

▲鯛

夕焼や鯛の網に人だかり
鯛網 鯛の中の小鯛かな
網あけて鯛ちらばる濱邊哉
七浦の夕雲赤じいわし引
大漁
十ヶ村鯛食はぬは寺ばかり
大漁や鯛こほる、濱の道
一家内舉つて出たり鯛網
今どりし鯛をわけて貰ひけり
轉地する安房の濱地や鯛引
安房へ来て鯛を食はぬ脚氣哉
夕餉すみて濱の散歩や鯛網
鯛干す磯静かなり遠鷗
鯛焼く隣同士や木槿垣
覗き行く夕餉の家や鯛賣

▲萩

水の上萩うつ高くこほれけり
名所や小僧案内す萩の庭
萩ちるや女机の愚案抄
僧房を借りて人すむ萩の花
古庭の萩に鏡さる御寺哉
萩寺の屏風に萩の發句哉
萩の風書燈消ねんとしてあかる
庭あれて萩の亂れをつくるはず
萩の題に歌作らしむ庭の萩
萩さいて俗に墮つ松の小庭哉
花少し残れる萩を刈りにけり
垣の外に萩さかせけり百花園

●秋之部

牛伴旅立き聞きければ

萩の画も月の句も一つ袋かな

讀小説

其果か萩と芒の心中かな
萩芒小町か笠はやふれたり
萩の中に猶白萩のあはれなり
萩芒風絶ゆることもなかりけり
妻を呼ぶ籠の鶉や庭の萩
切株に一枝さきし小萩哉
風をいたみ萩の上枝の花もなし
みちのくは馬の多さよ萩の花
萩は月に芒は風になる夕

▲蕎麥花

墓原のつゝきや寺の蕎麥畑
なだらなる岡の片側そばの花

▲菊

蕎麥植わて人住みけるよ藪の中
山越て三島に近し蕎麥の花
山明けぬあれば花蕎麥これは雲

縁日へ押し出す菊の車かな
菊賣るや十二街道の塵の中
菊の花天長節は過ぎにけり
竹立て、蠟燭さしぬ菊の中
菊畑南の山は上野なり

天長節

灯ともして御影祭るや菊の花

採菊籠

靈山の麓に白し菊の花
南山にもたれてさくや菊の花
旭に向くや大輪の菊露ながら

天長節

大君のあれまし、日や菊の花
菊時は菊を賣るなり小百姓
事もなげに菊さかせたる小家哉
菊さくや樓に登れば舟遠し
呉れと云へはした、か呉れし小菊哉
人形を刻む小庭や菊の花
門口や稻干す側の菊の花
日の旗や淋しき村の菊の垣
菊さくや大師の堂の普請小屋
旗一本菊一鉢の小家かな
木綿乍らよき衣着たり菊の花
かんでらや蕾少なき市の菊
酒買うて酒屋の菊を貰ひけり
酔さめや十日の菊に煙草のむ

▲野

百両の菊百両の萬年青哉

稲刈りて野菊おとろふ小道哉
瘦馬の老尼乗せ行く野菊哉
初旅をさくさめ顔の野菊哉
どつさりと山駕下ろす野菊哉
石原に瘦せて倒る、野菊かな

▲朝

顔

朝顔の引き捨てられし蕾かな

行脚より歸りて

葬に今朝は朝寝の亭主あり
逆上の人朝顔に遊ぶべし
朝顔や十日辰らぬ小商人
葬やいろく、に咲いて皆萎む
葬に吉原の夢はさめにけり

●秋之部

▲蘭

歸るかど朝顔さくや留守の門
朝顔やとても短き浮世あら
朝顔や九月の花に恥多き
葬や繪具にじんで繪をなさず
朝顔のしほまぬ秋となりけり
朝顔の一輪さしに萎れけり
葬や繪に書くうちに萎れけり
叩け共朝顔咲いて明家なり
朝顔の浅黄は薄き夜明か赤
朝顔の白きは繪にもか、ぬ也
朝顔や團十郎の名を憎む
朝顔や我に寫生の心あり
小傾城朝顔の君と申しけり
朝顔の鉢に分限を見する哉

蘭の主花さく事を厭ひけり
蘭を画いて壁に墨のこぼれけり
雨しぶく書齋の椽や蘭の花

自慙

蘭の花我に鄙客の心あり
人賤しく蘭の價を論しけり

▲紫苑

床の間や紫苑をいけて弓鞆

▲秋海棠

畫き習ふ秋海棠の繪具かな
病牀に秋海棠をいかきけり
化粧の間秋海棠の風寒し

病牀所見

臥して見る秋海棠の梢か赤
秋海棠朝顔の花は飽き易き

秋海棠に向ける病の寐床哉

女こびて秋海棠に何思ふ

美女立てり秋海棠の如き哉

秋海棠妹か好みの小庭哉

家人の秋海棠を剪らん云

ふを制して

秋海棠に缺をあてる事勿れ

濡れて居る秋海棠や手水鉢

秋海棠に齒磨こほす端居哉

毒蝶の秋海棠を犯すかな

祝結婚

君か植し秋海棠も甲斐ありき

移し植はし秋海棠や寐て見ゆる

▲白粉花

妹か庭や秋海棠とれしういと

▲女郎花

道端に白粉咲きぬ須磨の里
一あらし白粉の花倒れけり

▲水引草

彼岸過ぎ水引草の花さきぬ

▲芙蓉

八ツ時の太鼓打ち出す芙蓉哉
明家の草の中より芙蓉哉

▲桔梗

紫のふつとふくらむ桔梗哉
雨晴れて荒野の桔梗夕日照る
種に刈る桔梗長く花ひとつ
桔梗折れば撫子恨む女心
一籠のこき紫や桔梗賣
銅瓶に白き桔梗をさゝねたり
桔梗刈りて菊の下葉の枯れし見ゆ

▲女郎花

舟引の背丈短し女郎花

女郎花宮守ならば物語れ

關越わて野道になりぬ女郎花

小法師に心ゆるすな女郎花

駕昇は裸で寐たり女郎花

初恋

女郎花男郎花戀のはじめなり

裁縫を修業する人に

女郎花女なからも一人前

雨の日や皆倒れたる女郎花

女郎花刀のこじりさはりけり

▲芦の花

鷺落ちて夕月細し芦の花

柴又へ通ふわたしや芦の花

▲鶏頭花

鶏頭活けて地藏を洗ふ願かな
鶏頭や二度の野分に恙なし
藁葺の法華の寺や鶏頭花
鶏頭の花に涙をそゝぎけり
鶏頭に犬の子の寐る日向かな
村雨の過ぎて鶏頭の夕日か
佛壇に鶏頭枯るゝ日數か
鶏頭を伐り倒したる夕日哉
鶏頭の十本ばかり百姓家

▲雁來紅

葉鶏頭や老菜の家奇麗なり
中山寺にて
釣鐘の寄進につくや葉鶏頭

▲蕃椒

蕃椒廣長舌をちゝめけり
秀調死せしよし
悪の利く女形なり唐芥子
鉢植の唐辛子食ふ世帯哉
唐辛子やゝひんまかつて猶辛し
唐辛子日にゝ秋のおそろしき
はらわたに通りに赤し唐辛

自慙

▲草花

草の花水水車場へ分れ行く
草花の一筋道や湯元まで
五文つゝに分けて淋しや草の花
草花や小川に添うて王子まで
西洋の草花赤し明屋敷
只の紙に草花にじむ繪の具哉

古戦場

骨も見わすむくろも見わす草の花
草花の鉢並べたる床屋哉
山駕や榛名上れば草の花

▲檀特花

草むらゝ檀特花僅に赤し

▲曼珠珠華

道端やきよろりとしたる曼珠珠華
其あたり似た草もなし曼珠珠華
慧苾仁の小道盡きたり曼珠珠華

▲稻の花

大藩のもの静かなり稻の花
大寺の上棟式やいねのはな
南無大師石手の寺よ稻の花

●秋之部

▲薄

稻の花道鐘山の日和かな
うぶすなに幟樹てたり稻の花
山城に残る夕日や稻の花
湯治二十日山を出づれば稻の花
稻の花東籬菊いまた苔なし

十丈の杉六尺のすゝきかな

箱根

槍立てゝ通る人なし花すゝき
くゝり上げて片戦きする芒哉
芒刈る童に逢ひぬ箱根山
よべこゝに花火あけたる芒哉
穂薄や袴多き野邊送り
伊豆相摸境もわかす花すゝき
田を隔てゝ芒の岡を見得たり

馬の尾を束ねてくゝるすゝき哉
箱根路や薄に不二の六合目
猪の嵐に向ふすゝき哉
犬に逢ふ芒の山や里近き
草刈のかり揃へけり花芒
箱根山芒八里と申さばや
山姥の力餅賣るすゝき哉
菅笠の揃ふて動く薄かな
草鞋の緒切れてより込む薄哉
芋の湯氣團子の露や花芒
一秋の思ひに瘦するすゝき哉
獵人の鐵砲見ゆるすゝき哉
旅はものゝ那須の芒にたまされな
しばられて片をよきする芒かな
駕二つ徒歩五六人花すゝき

▲尾花

海見わた尾花か末の白帆かな
我亦虹

▲夕顔
何ともな芒かもとの我亦紅
驚くや夕顔落ちし夜半の音

美人の面を拂子さ並へかけたる

夕顔の垣根覗きそ美人禪
夕顔や野分れそるゝ實の太り
夕顔の實をふくべとは昔哉
夕顔も絲瓜も同じ柵子同士
夕顔の柵に絲瓜も下りけり
鄙の宿夕顔汁を食はされし
野分近く夕顔の實のふどり哉
雨の日を夕顔の實の眺め哉

▲蓼の花

門前に船つあきけり蓼の花

箱根茶屋

犬蓼の花くふ馬や茶の煙

王子製紙場

水赤く泡流れけり蓼の花

▲鬼燈

鬼燈をならしやめたる唱歌哉
鬼燈をほうと吹きたる禿かな

▲盞

朝川の盞を洗ふ匂ひかな
一束の葉生姜ひたす野川哉

▲萩

濱萩にかくれて低し蟹か家

▲萱

●秋之部

▲葛

誰か塚を萱草咲ける自から

葛さかる岩の凹みや堂ひとつ
浪際に葛這ひにけり十餘丈

水晶巖

水晶の巖に葛のにしき哉

▲葛

葛の葉や何におどろく夕間暮
葛花や秋をたつねて這ひ廻る

▲芭蕉

芭蕉翁笠塚

笠塚の笠を根にして芭蕉哉
隣から燈のうつる芭蕉かな
芭蕉破れて繕ふべくもあらぬ哉
破れ盡くす貧乏寺の芭蕉哉

手燭袖に芭蕉の廊下通りけり
さら〜と白雲起る芭蕉哉
がさ〜と猫の上りし芭蕉哉
芭蕉青く鶏頭赤き野寺かな

試に芭蕉の題宇蘇子に擬す
大寺の施餓鬼過ぎたる芭蕉哉
廻廊の曲り〜の芭蕉かな
屋根葺のごみ掃き落す芭蕉哉
貧村に寺ひとつあり破れ芭蕉
日蝕すること八分芭蕉に風起る
青厓と愚庵芭蕉と蘇鐵哉

▲瓢
試に名をは巾着ふくべかか
取付いて松にもひとつふくべ哉

子を育つ瓢を育つ如きかも
夕顔の愚に及ばざるふくべ哉

▲絲瓜
秋の燈の絲瓜の尻にうつりけり
牡丹にも死なす瓜にも絲瓜にも
病間に絲瓜の匂など作りける
病秋のなみめ
棚の絲瓜思ふ所へぶらさがる
目鼻かくへちまの顔の長さ哉
秋の色赤き絲瓜を畫にかゝむ
病間にへちまの花の落つる晝
默然とへちまのさかる庭の秋
日掩棚絲瓜の蔓の這ひ足らず
草木國土悉皆成佛
絲瓜さへ佛になるぞ後るゝな

▲西瓜
成佛や夕顔の顔絲瓜の尻

隅田川西瓜の皮の流れけり
船頭の西瓜を切るや納涼船
起し繪を照す西瓜の燈籠哉
晝後渡邊某に寄す

南瓜の賦西瓜の簞や村夫子
切り賣の西瓜喰ふあり市の月
赤行燈西瓜を切りて並べけり
薄月夜西瓜を盗むこゝろあり
物も云はで喰ひ付たる西瓜哉

▲鳥瓜
水車塲を圍む小藪や鳥瓜
▲木の子
松茸や菊の膾の色に出づ

●秋之部

茶茸得て歸る小山のしめな哉
大きなる松茸に逢着す端山哉
物の香の茸あるべく思ふかか
松茸や思ひ出でたる古人の匂
連の者の松茸とりし妬み哉
松茸の捨つるに惜しき籠の中
秋もはや松茸飯の名残かな

▲新米
神を祝ふ小豆の飯や今年米
新米の二十駄ばかり城下口
新米や目利きかしこき掌
新米を賣りに出でたり小百姓
新米を河の東に運びけり
粟畑や家遠くして小鳥網

故郷や道せまくして粟垂る

露月君村居

粟の穂ニ鶏飼ふや一構

石手寺

通夜堂の前に粟干す日南哉
草鞋の緒結び居れば粟穂笠を打つ
行く馬のあとにうなづく粟か稗か

▲稻

稻の香の嵐になりし夕かな
雨雲の夕榮すなり稻莖
稻の穂や南に凌雲閣低し
雨含む上野の森や稻日和

法隆寺

稻の雨班鳩寺にまうでけり
稻つけて馬が行くなり稻の中

静かさや稻の葉末の本願寺

稻の穂に十里の雨の静かなり

婆々つれし佛詣りや稻曇

稻の香や小山に添ふて瀛車走る

稻積んで車推し行く親子哉

稻舟や穂夢の渚菊の岸

稻の香や瀛車から見ゆる法隆寺

掛稻や野菊花さく路の端

かけ稻に蚤飛びつく夕日哉

掛稻の上に短かし塔の先

掛稻や狐に似たる村の犬

掛稻や雨雲蔽ふ鴻の臺

▲初

初干すや鶏遊ぶ門の内

▲掛煙草

あら壁や蟬老いてかけ煙草

▲槽

槽田や瘦せて慈姑の花一つ

▲新綿

日當りや綿も干し猫も寐る戸口

▲枝豆

枝豆や病の床の晝永し
枝豆や三寸飛んで口に入る
學校に行かず枝豆賣る子哉
枝豆の月より先きに老いにけり
枝豆のつまめは弾く仕掛哉
芋を食はぬ枝豆好の上戸哉
芋わり豆あり女房に酒をねたり
枝豆や俳句の才子曹子達

▲葡萄

●秋之部

吹き下ろす妙義の霧や葡萄園

なり初めし自家の葡萄を侷めけり

黒き迄に紫ふかき葡萄かな

朱硯に葡萄のからの散亂す

▲芋

芋の子や籠の目荒み轉け落つ

三日月の頃より肥る子芋哉

十人の家内や芋の十皿ほど

盛り分つ十皿の芋や臺所

大家や芋を煮て居る臺所

▲唐柜

唐柜の殻でたく湯や山の宿

黍からや鶏遊ぶ土間の隅

高黍の上に短かき白帆哉

唐黍に背中打たるゆあみ哉

▲草の實

草の實や笠かさわれはほろく
草の實の赤くして馬も喰はざりき
毒草の美しき實を結びけり
蔓草を引けはしたゝか實の落る

▲蓮實飛

蓮の實を飛ばせて殻はしなびける
蓮の實の飛ぶや出離の一大事
笑てはとび怒てはとび蓮の實なし
蓮の實やとんで小僧の口に入る
極樂は蓮の實飛んで月まろし
結脚こゝに蓮の實の飛ぶ音聞かん
蓮の實はとびぬ馬見所は崩されぬ
蓮の實のとんで地に入る思哉

▲末 枯

末枯るゝ杉の下道齒朶薊

▲木 犀

木犀や母か致へる二弦琴
木犀や人は寐たる庭の月

▲木 榿

道はたに蔓草まどふ木榿哉
花木榿家ある限り機之音
汐風や瘦せて花なき木榿垣
木榿垣出水の跡を殘しけり
木榿さく土手の人馬や酒田道
木榿さいて里の社の普請かな
木榿垣人も通らぬ小道かな
道はたの木榿にたまる埃哉
十軒の長屋とりまく木榿哉
かけ落の夫婦来て住む木榿垣

木榿垣本所區を野に出る所
繪屏風に木榿をもるゝ夕日哉

▲紅 葉

家やいつこ夕山紅葉人歸る
白瀧の二筋かゝる紅葉かな
紅葉見の船つけて居る三軒家
幕吹いて伶人見ゆる紅葉哉
灯ともしの顔に灯うつる紅葉哉
南岸の茶屋北岸の寺や村紅葉
騎馬一人従者五六人紅葉狩
愚庵十二勝の内

錦楓畦

紅葉散りて夕日少なし苔の道
紅葉する木立もなしに山深し
紅葉折て夕日寒かる女かみ

●秋之部

紅葉焼く法師は知らず酒の爛

嵐山

松の木はあらはれにけり村紅葉
牛の子を追ひく這入る紅葉哉
一つかみつゝ爐にくべる紅葉哉
紅葉見ぬ瀧見える茶屋の床几哉
神殿の御格子おろすもみち哉
唐かねの鑄ぬきの門や薄紅葉
人呼ふや紅葉の宿のきぬかつき
山に倚て家まはらなり村紅葉
杉木立中に紅葉の家居あり

▲柿紅葉

蕎麥白く柿の紅葉に夕榮す

▲檀紅葉

面白や一尺の木も檀紅葉

▲葛紅葉

並松や根はむしられて葛紅葉

▲澁柿

露月國手を賣る

澁柿は馬鹿の薬になるまいか
澁柿の木陰に遊ぶ童かな

▲柿

かぶり付く熟柿や髯を汚しけり
店先の柿の實つゝくからす哉
明屋敷凡そ百本の柿熟す
書に倦みて燈下に柿をむく夜半
柿喰うて供水の詩を草しけり
側に柿くふ人を恨みけり
柿あまた食ひけるよりの病哉
柿くはぬ病に柿をもらひけり

停車場に柿賣る柿の名所哉

ころ柿も一年ふりや淡路島

(廿四年秋)

柿食ふも今年許りと思ひけり
干柿や湯殿のうしろ納屋の前
風呂敷をほどけば柿のころけ臭
我好きの柿を食はれぬ病かな
大あるやわらかき柿好みけり

法隆寺の茶店に憩ひて

柿くへは鐘かななるなり法隆寺
柿喰ふや道鑑山の婆々か茶屋
小祭や柿賣る店の柿の皮
樽柿の少し澁きを捨てかねし
柿喰うて腹痛み出す旅籠哉
柿熟す愚庵に猿も弟子もなし

▲桃の實

つりかねの蒂の所か澁かりき
胃を病んで柿を食はれぬいさめ哉
道はたの桃の木に實はなかりけり
桃の實の桃原を出て流れけり
桃盗む子を叱りけり垣の内
虫はみて桃紅の腐りかな
桃の實を論語よむ子に分ちけり

▲柘榴

盆栽の柘榴實垂れて落ちんとす
はちわれて實もこほさるゝ柘榴哉

▲梨子實

佛へと梨子十許りもらひけり
大なる梨子を包みし袱紗哉
小刀や鉛筆を削り梨子を剝く

●秋之部

▲柚子

鈴なりの小梨に村の曇りかな
行秋の梨子并べたる在所哉
日毎くゝ十顆の梨を喰ひけり

▲木の實

古家や累々として柚子黄あり
荒壁や柚子に梯子す武家屋敷
鳥鳴いて赤き木の實をこほしけり
堂守の木の實を拾ふ掃除かな
貧淋し喰へぬ木の實の落る音
鳥赤いて笠にこほるゝ何の實ぞ

▲榎の實

榎の實散る此頃うとし隣の子

▲棕の實

棕の實や罔かけたる家の北

▲蜜柑

根府川や石切る山の青蜜柑
路南紀伊國に入蜜柑畑
皮剥けは青けぶり立つ蜜柑哉
佛壇の柑子を落す鼠かな

▲栗

焼栗のはねて驚く一人かな
路端に栗賣並ぶ祭かな
栗飯や目黒の茶屋の發句會
いながら栗呉れる人の誠哉
栗落ちて鮎の道は絶わにけり
栗飯や不動参りの大工連
栗のいが鼠の穴をふさきけり

▲棗

棗多き古家買うて移りけり

▲椎の實

祇園の鴉愚庵の棗喰ひに来る
行脚より歸れば棗熟しけり

▲團栗

どん栗の廣葉貫く音すなり
團栗もかきよせらるる落葉哉
椎ひろふあとに團栗あはれ也
團栗の落ちずなりたる嵐かな
猿聞く夜團栗落る頻りなり

▲無花果

無花果の落ちて呉れぬ家主哉

▲色かへぬ松

色かへぬ松や主は知らぬ人
再遊松林館

▲散柳

大柳散り盡くす共見わさりき
根岸音無川
柳散り菜屑流るゝ小川かな
今も尙柳ちるなり山谷堀
柳散る秦淮と詩に作りけり

▲秋雜

來て見れば風か吹く也須磨の秋
上野著
みちのくを出て賑はしや江戸の秋
蛸干して鳥追ふ鬻や須磨の秋
汽車の窓に首出す人や瀬田の秋
歌石に別る

●秋之部

行く我にとゝまる汝に秋二つ

傳教大師發

此の袖や秋を定めて一千年

親鸞上人發

御連枝の末まで秋の錦かな
白き馬にめしたるとのこ見えす秋
裸體畫の鏡に映る朝の秋
夕顔と絲瓜残暑と新涼と
秋一室拂子の髻の動きけり
病間あり秋の小庭の記を作る
題美人畫

うすものゝ秋に勝へさる姿哉
くわらくと何に灯をたく秋の村
氷噛んで毛穴に秋を覺わたり
大坂青々に剛ゆ

奈良漬の秋を忘れぬ誠かな
病牀の財布も秋の錦哉
水海の秋の小魚を奉る
秋高き天文臺の灯かな
賑かに暮るゝ日もあり庵の秋
順禮に追ひこされけり秋の旅
家主か植わて呉れたる松の秋

冬之部

一三四

▲初霜

初霜や束ねよせたる菊の花

▲霜

石落の葉の霜に尿する小僧哉
渡船場や下駄はいて乗る船の霜
霜の蟹や玉壺の酒の底にこり
鳥にやる菜をむしりけり庭の霜
神前の橘の木や霜除けす
ほつかりと日の當りけり霜の塔

祝凱旋

宵ぬけ酒ふるまはん髯の霜
朝霜に青葉も植えぬ小庭哉
庭石や霜に鳥なく藪柑子

オ

朝霜や藁家はかりの村一つ
鍋の霜日の短きも限り哉
九つか霜夜の鐘に泣く女
兵營や霜にあれたる國府の臺
麥の芽のほのかに青し朝の霜
旭のさすや紅る浮ぶ霜の不二
汐濱の霜かきならず朝日哉
朝霜や屋根のつづきの安房の海
有明の水仙剪るや庭の霜

▲初時雨

鶏頭を剪るにもものうし初時雨
路次口に油こほすや初しくれ
買うて来る釣瓶の底や初時雨

▲時雨

鶏頭の黒きにそくしくれ哉

●冬之部

稻かけて神南村の時雨かな
土佐の海南もなしに時雨けり
しくるゝやいつ迄青き烏瓜
牛一つ見わたしくるゝ尾上哉
馬糞のからびぬはなし村時雨
傘曲る喰物横町小夜時雨
さそひうつ五山の鐘や夕時雨
烏鳶をかへり見て曰くしくれんか
稱名の聲にしくるゝ野寺かな
松に時雨杉に鳶なく夕日かな
夕鴉一羽おくれてしくれけり
時雨してねぢけぬ菊の枝もなし

病中

しくるゝや葎弱冷へて臍の上
小夜時雨上野を虚子の來つゝあらん

時雨るゝや腰湯ぬるみて雁の聲
錦木は倒れしまゝに夕時雨
嘈々としくるゝ音や四つの絲
吊柿の二筋三筋しぐれたり

入獄者に

世の中は時雨るゝに君も瘦せつらん

鳴立庵の圖に題す

西行も虎も時雨ておはしけり
新宿に荷馬ならふや夕時雨
出女の聲に降り出す時雨かな
しくるゝや紅薄き薔薇の花
しくるゝや鶏頭黒く菊白し
面白や富士に取つく幾時雨

▲初雪

初雪や海を隔てゝ何處の山

初雪をふるへは箋の雫哉

▲雪

杉の雪一丁奥に仁王門
金殿の灯火細し夜の雪
一つ家の燈火低し雪の原
大雪や關所にかゝる五六人
松の雪わかれて落ちけり水の中
五六人熊擔ひ來る雪の森
降やむや雪に灯ともる峰の堂
富士の山雪盛り上げし姿かな
雪の日や白帆きたなき淡路島
灯のともる東照宮や杉の雪
勘當の子を思ひ出す夜の雪
鶯の羽に薄雪つもる静さよ
合羽つゝく雪の夕の石部驛

病中 二句

雪降るよ障子の穴を見てあれば
幾度も雪の深さを尋ねけり
大雪になるや夜討も終に來ず
雪の脚資永山へかゝりけり
湖青し雪の山々鳥歸る
わいゝと攻め寄る雪の砦哉
辻堂に火を焚く僧や夜の雪
隠れ住む古主を訪ふや雪の村
藁頭巾の雪振ふたる戸口哉
小坐頭のたはれをかしや雪礫
雪の家に寐て居ると思ふ許り也
丈低き夷の家や雪の原
雪の夜や箋の人行く遠明り

▲吹雪

●冬之部

千鳥なく灘は百里の吹雪哉

町近く來るや吹雪の鹿一つ

病む人に戸あけて見する吹雪哉

馬の尻雪吹きつけてあはれ也

南天に雪吹きつけて雀なく

▲雪女

雪女旅人雪に埋みけり

▲笑

獺の橋杭つたふみそれかな

棕櫚の葉のはさりゝと笑哉

大船の梯子を上げる笑かな

▲霞

風見鴉霞の中に惑ひあり

吹かれ落ちて霞魯縞に力あし

藁灰にまぶれて了ふ霞かき

から城に鵠さわぐあられ哉
口ごはき馬に乗たる霞かな
陣笠のそりや狂はん玉霞
板塀に寄りも付かれぬ霞哉
甲板に霞の音のくらさ哉

琵琶を聞く

四絃一齋霞たはしる壘哉
吳竹の奥に音ある霞かな
鷺の子の兎をつかむあられ哉
鶴の巢を傾けて降る霞哉
鍋焼の行燈をうつあられかな
夜芝居のせりふ聞ぬ霞哉

▲北風

北風に鍋焼温飩呼びかけたり

▲風

木枯や病の舌に梨子の味
木枯や暖室の花紅に
木枯や鱒乏しき鱒網
風や麓の方に鍛冶の音
木枯に三河島菜の葉張かな
風や杉葉吹き散る能舞臺
木枯や大佛殿は聾あり
君待つ夜又風の雨になる
風や鐘ひきすてし道の端
木枯やあら緒くひ込む菅の笠
愚庵和尚に寄す
木枯の淨林の釜恙なきや
木枯や夜着着て町を通る人
風やよろ／＼芒よろ／＼と
風や瀧々として瀧落つる

▲冬日影

冬の日のおたらすなりし乾飯哉
冬の日や入りて明るし城の松
冬の日や馬の背中に落かゝる
硝子越に冬の日あたる病間哉

小川博言博士の臺灣に赴くを送る

君が行くは風吹かぬ處かな

▲寒月

寒月や石塔の影杉のかけ
寒月や雲盡きて猶風烈し

▲冬の月

家根の上に火事見る人や冬の月
魚河岸や鮫に霜置く冬の月
子を捨つる女と見ゆる冬の月
木の影や我影動く冬の月

●冬之部

▲つめたさ

日の當る石にさわればつめたさよ

冬の東京淺草區

▲寒さ

白石の墓のつめたさ無縁かな
半焼の家に人住むさむさかな
大船の中を漕き出し寒さ哉
蕎麥屋出て永坂上る寒さ哉

冬の東京牛込區

寒き日を穴八幡に上りけり
狼の糞見て寒し白根越
御格子に切髪かゝる寒さ哉
栴檀の實はかりになる寒さ哉
冬川の涸れて蛇籠のさむさ哉

碧梧桐痘を患ひたるに

寒からふ痒からふ人に逢たから
寒しきは火に焚く木佛さへもなければ
寒き日を土の達摩に向ひける
ぼつちりと味噌皿寒し膳の上
うねくと兀山寒し三河道
山風にはうと立つたる寒さ哉
酔さめの車に乗れば足寒し
山城に睨まれて居る寒さ哉

▲凍

見あけたる高石がけの寒さ哉
剣に舞へは蠟燭寒き酒宴哉
寒燈明滅小僧すよくと寐入り梟
苦るし寒し風を吞込む坂の上
蠟燭の涙を流すさむさかぢ
雲なくて空の寒さよ小山越
星たちて石とある夜の寒さ哉
寒さうな外の草木や硝子窓

▲凍
ごもし行く灯や凍らんと禰宜か袖
靴凍て、墨ぬるべくもあらぬ哉
道いて、跣足参りの通りけり
枯菊や凍てたる土に立ち盡す
煩凍て、兒の歸り來る夕餉哉
星滿る胡北の空や角凍る

▲牙

猩々の三七日頃や鐘凍る
星牙て篝火白き砦かな
冴る夜の北斗をこがす狼煙哉
琵琶冴て星落ち來る臺かな

▲鐘

鐘冴る夜かゝげても灯の消んとす

▲冬の日

冬の日の短かけれども石部迄

▲霜夜

不忍の鴨寐静まる霜夜哉

▲初冬

初冬の家ならびけり須磨の宿
初冬の月裏門にかゝりけり
初冬の萩も芒もたばねけり

▲月凍

驛遠く月凍る野をいそぎけり

▲鐘凍

上野公園

●冬之部

▲冬 至 冬立つや立たずや留守の一つ家

佛壇に水仙活けし冬至かな
物干の影に測りし冬至かな

▲神無月

鳥居より内の馬糞や神無月

▲霜 月

霜月の梨を田町にもごめけり

▲小 六月

のびくし歸り詣てや小六月

▲小 春

牛の子や賣られて遊ぶ小六月

▲小 春

賣出しの旗や小春の廣小路

▲小 春

小春野や草花瘦せて晝の月
水草の花に小春の西日かな

野の茶屋に蜜柑並べし小春哉
冬の東京四谷區

縹縷を干す小春日和や餃ヶ橋

大寺の椽廣うして小春かな

屋の棟に鳩並び居る小春哉

凧を抜け出て山の小春か那

窓の影小春の蜻蛉稀にとぶ

瘦村に見ゆや小春の凧

小春日や南を追ふて蠅のとぶ

▲冬 ざれ

冬ざれや石臼残る井戸の端

冬ざれや稻荷の茶屋の油揚

冬ざれや狐も喰はぬ小豆飯

冬ざれや水なき川の橋長し

常盤木や冬ざれまさる城の跡

▲冬 枯 冬ざれや石燈籠の鳥の糞

▲冬 枯

冬枯や庚申堂の小豆飯

はらわたの冬枯て只發句かき

冬枯の垣根に咲くや薔薇の花

古松場

冬枯や曰く庭前の松樹子

冬枯や蛸ぶら下る煮賣茶屋

冬枯や巡査に吠る里の犬

冬枯て馬鹿も利口もなかりけり

冬枯のさまや芭蕉も義仲も

冬枯や燦爛として阿房宮

冬枯やはるかに見ゆる真間の寺

冬枯や奈良の小店の鹿の角

▲霜 枯

●冬之部

霜枯の佐倉見上ぐる野道哉

▲師 走

夕霧より伊左さま參る師走哉

傾城を見たる師走の温泉哉

海廣し師走の町を出離れて

▲年 の 暮

風吹いて今年も暮れぬ土佐日記

馬に乗る嫁入見たり年の暮

▲行 年

松蘿玉液子を祭る

詩百篇君去て歳行かんとす

行年の人鈍にして子を得たり

行年や母健かに我れ病めり

▲春 待

北窓に春待つ梅の老木哉

春待や只四五寸の梅の苗

▲冬木立

四辻や東芝山冬木立
其中に境の棚や冬木立
菜畑や小村をめぐる冬木立
岡添や杉の木まじり冬木立
冬木立五重の塔の聳えけり
加賀殿の御屋敷跡や冬木立
汽車道の一筋長し冬木立
絶壁に月かゝりけり冬木立
馬行くや道鐘山の冬木立
めらゝと燃ゆる伽藍や冬木立
村もさし只冬木立まばらなり

▲冬の山

棒杭や四つ街道の冬木立
冬木立煙のたゝぬ小村かな
門前のすぐに坂なり冬木立
鳥歸る冬の林の塔暮れたり

▲冬の川

寄邊なき冬の野川の小鱼哉
冬川に捨てたる犬の屍かな
冬川の菜屑啄む家鴨かな
玉川
鮎死んで瀬の細りけり冬の川
冬川に鴨の毛かゝる芥かな
冬川や家鴨四五羽に足らぬ水
冬川や魚の群れ居る水たまり

▲冬田

水筋は溜れて芥や冬の川
身を投げて蠢死なんとす冬田哉
きぬゝの大門出れば冬田哉
行きくゝて本所離るゝ冬田哉
道哲の裏を過ぐれば冬田哉
蜜柑剥いて皮を投げ込む冬田哉
汽車道の一段高き冬田かな
駒込の坂を下れば冬田かな
あがゝと冬田に低し雁の列

地租増徴

▲枯野

此邊にも税の増したる冬田哉
家めぐる冬田の水の寒さかき
眞直に富士迄行かん冬田哉

●冬之部

金州の城門見ゆる枯野哉
三日月や枯野を歸る人と犬
乞食の鑊錢拾ふ枯野哉
草鞋薄し枯野の小道ばらを踏む
足元に青草見ゆる枯野哉
一つ家に鉦打鳴らす枯野哉
松杉や枯野の中の不動堂
信長の榎残りて枯野かな
人絶て狂女に逢ひし枯野哉
旅人の蜜柑喰ひ行く枯野哉
馬見わて雉子の逃げる枯野哉
夕日負ふ六部背高き枯野哉
鉦も打たで行くや枯野の小順禮
わらんべの犬抱て行く枯野哉
野は枯て杉二三本の社かな

冬の東京 小石川

梅龕か墓に花なし霜柱
蓄つく梅の苗木や霜はしら

▲水

刈株に水を離るゝ水かな
山かけに日のさゝぬ池の水哉
水鉢の水を捨てる葉蘭哉
諏訪の神狐と現じ初氷
溝川に竹垂れかゝる水かな
鶺鴒の刈株つたふ水かな
氷切る人かしがまし朝嵐
森の中に池あり氷厚きかな
上げ汐の水にのぼる夜明哉
ひゝわれる音や旭のさす田の水
汐落ちて水の高き渚かな

提灯の一つ家に入る枯野哉

汽車道に鳩の下りたる枯野哉

枯野原團子の茶屋もなかりけり

めいゝくに松明を持つ枯野哉

珍らしく女に逢ひし枯野哉

馬糞もともに焼かるゝ枯野哉

汽車道の此頃出来し枯野哉

雉子つけて歸る一騎や冬の原

鳥とんで荷馬驚く枯野かな

▲冬 野

貝塚に石器を拾ふ冬野哉

▲霜 柱

土と共に崩るゝ畦の霜柱

初敷くや蹈めば落ち込む霜柱

菊も刈り芒も刈りぬ霜はしら

田鼠の走るひゞきや初氷

古沼の鏡もなしに氷かな

水鳥の浮木に遊ぶ氷哉

潮流の北より来る氷かな

不忍池

東臺の松杉青き氷かな

古沼の塵も落葉も氷かな

飯粒の板にひつつく氷かき

▲水 柱

枯れ盡す糸瓜の棚の水柱哉

佛立つ大盤石の水柱かな

▲足 袋

不精さや布團の中で足袋を脱ぐ

律僧の紺足袋穿つ掃除かき

▲手 袋

手袋の左はかりになりける

糸赤く手袋の破れつくろひし

▲冬 帽子

四角なる冬帽に今や歸省かな

冬帽や十年にして猶屬吏なり

▲綿 衣

▲蒲 團

短かさに蒲團をひけば猫の聲

●冬之部

脛あらはに薩摩鹿摺の綿子哉
綿衣黄也村醫者と見て供一人

▲冬服

冬服の胸あひかぬる古着哉

▲紙衣

紙衣着て出れば我に星落つる
味噌汁を膝にこほせし紙衣哉
傳へ来て陶淵明の紙衣かな

▲頭巾

月花に元けた頭や古頭巾
頭巾着て平家を語る法師哉
酔ふて吟す東坡が頭巾脱げんとす
大黒の頭巾を笑ふ布袋かな
戯作者のたぐひなるべし絹頭巾
頭巾着て人行きかふや山の道

頭巾着て物は心にさからはす
人丸は烏帽子芭蕉は頭巾にて
辨慶は其頭巾こそ兜なれ

▲綿帽子

爺と婆と江戸見に行くや綿帽子

▲二重廻

振り返る二重廻しや人違ひ

▲毛布

ケットーの赤きを被り本願寺
毛布被る一群れ寄席の歸り哉
十年の苦學毛のなき毛布哉
毛布着て机の下の所かな

▲襟卷

縮緬の襟卷ラッコの帽子かな
停車場の倚子に襟卷忘れしよ

襟卷に顔包みたる車上かな

▲櫛

かんじきに馴れたる奥の女哉

▲雪車

大木を載せたる雪車の迂り哉

▲玉子酒

風邪ひきのわかき主や玉子酒
ふるまはん深草殿に玉子酒
かせひきの妻よ夫よ玉子酒

▲煮凝

煮こぼりの出来るも嬉し新世帯

▲鍋焼

鍋焼を我待つ居れば稻荷餅
鍋焼や火事場に遠き坂の上
寒き夜や妹かり行ばうどん賣

▲焼芋

焼いもとしるく風呂敷に烟立つ
焼芋の水氣多きを場末かな

▲風呂吹

風呂吹やにるりに名あるにるり寺
ふる吹はあつく麥飯は冷たく
大なるをこそ風呂吹と申すらめ
風呂吹や小窓を壓す雪くもり
風呂吹に集る法師誰々ぞ

明月和尚百年忌

▲納豆

風呂吹を喰ひに浮世へ百年目
歌うて日納豆賣らんか詩賣らんか
骨は土納豆は石となりけらし

納豆や飯たき一人僧一人

▲薬喰

蘭學の書生ありけり薬くひ
戸を叩く音は狸かくすり喰
利目あらん利目なからん薬喰

根岸草庵

黄鳥に鍋のぞかせじ薬喰
薬くひの鍋こほりつく朝哉
乾鮓にわびし日頃やくすり喰

▲餅搗

餅をつく音やお城の山かつら

▲麥蒔

麥蒔や束ねあけたる桑の枝
麥をまく花咲爺の子孫かな
豆の如き人皆麥を蒔くならし

▲蕪曳

此の頃は蕪曳くらん天王寺
女達の赤いかぶらを曳て居る

▲火燧

男の童と女の童と遊ぶ火燧哉
炬燵から見ゆるや橋の人通
並べけり炬燵の上の小人形
火燧して語れ真田が冬の陣
いくさから便り届きしこたつ哉
縫物の背中にしたる炬燵かな

戦さに行きて足を斬られたる人に

わびしさや火燧に伸す足の丈

香盤の越後を出て臺灣に赴くに

荷じまひやこたつこそばの夏衣
假初の口説にすねるこたつ哉

欠

MISSING

煤掃の埃しつまる葉蘭哉
煤掃の音はたとやむ晝飯哉

▲北窓塞

北の窓日本海をふさぎけり

▲冬構

菜垣に菜畑かこふや冬構
葉かけて風防ぐなり冬構

▲冬籠

看病の我をとりまく冬こもり
書き馴れて書きよき筆や冬籠
筆多き硯の箱や冬こもり
耳糞の蜂になるまで冬籠
冬籠佛壇の花枯れにけり
袴着てゆかしや人の冬籠
女神の裸躰の像や冬こもり

●冬之部

何事もあきらめて居る冬籠

冬の東京赤坂區

青山の學校にあり冬こもり
椽側へ出て汽車見るや冬籠
冬籠人の多さよ上根岸
釋迦に問ふて見たき事あり冬籠
冬籠長生きせんと思ひけり
老僧の爪の長さよ冬こもり
十年の耳こ掻きけり冬籠
冬籠日記に夢を書きつける
手をちゝめ足をちゝめて冬籠
草庵
薪を割る妹一人冬こもり
一村は留守のやうなり冬籠
音もせず親子二人の冬こもり

硝子窓に鳥籠見ゆる冬こもり
硝子窓に上野も見わた冬こもり
蕪村の蕪太祗の炭や冬籠
冬こもり煙のもる、壁の穴
冬籠顔も洗はず書に對す
かゆと云ふ物をすゝりて冬籠
咲き絶えし薔薇の心や冬こもり
冬籠小鏡を借りて笑はる、
冬籠隣も知らぬ味噌の味

▲掛 乞

掛乞の曰く主人の曰くかな

▲年 忘

年忘れ橙むいて酒くまん

冬の東京牛込區

早稻田派の忘年會や神樂坂

年忘れ坐頭と替女的一座哉
大殿の笑ひ聞わつ年わすれ
年忘れ酒泉の大守鼓打つ

▲酉の市

吉原で人にはぐれし酉の市

▲夜興引

夜興引や犬心得て山の道

夜興引の草鞋はき居る軒端哉

▲鷹 狩

鷹狩や豫陽の太守武を好む

▲力 草

鶴の羽の抜けて残りぬ力草

▲網 代

曉や凍ねも死なで網代守

▲顔見世

顔見世や團十郎は傘さして

▲寒 聲

寒聲は寶生流の謡ひかな

▲寒 垢離

寒垢離の水を浴び居る月下哉

寒垢離や信心堅き弟子大工

寒垢離や不動の火燗凍る夜に

▲水 涕

水鼻に旅順を語る老女哉

▲霜 やけ

霜やけの手より熬豆こぼしけり

▲輝

輝に油ぬりつゝ待つ夜かな

足袋脱いて輝見るや夜半の鐘

▲髪 置

髪置や惣領の甚六にて候

▲亥の子

ふるさとの大根うまき猪の子哉

▲達磨忌

達磨忌や枳殻寺に提唱す

達磨忌や只ふつゝと粥白し

▲蕪村忌

風呂吹や蕪村百十八回忌

蕪村忌や奥のはたゝ撮の蕪

蕪村忌や風呂吹の題蕪の題

風呂吹を食ふや蕪村の像の前

蕪村忌にわくれて蕪扇きけり

▲芭蕉忌

葯蕪に發句書かばや翁の日

無落款の芭蕉の像を祭りけり

芭蕉忌や芭蕉に媚る人鄙し
芭蕉忌や其角嵐雪右左

芭蕉忌は何の儀式もなかりけり
芭蕉忌に芭蕉の像もなかりけり

芭蕉忌や我に派もあく傳もなし
芭蕉忌や我俳諧の奈良茶漬

眼中の人老いにけり桃青忌
芭蕉忌や維摩を祭る隣あり

▲天長節
粥にするや天長節の小豆飯

人も來ぬ天長節の病哉
草の戸や天長節の小豆飯

▲耶蘇祭
子供勝にクリスマスの人集ひけり

結び置きて結びの神は旅立ちぬ
どの馬で神は歸らせたまふらん

▲寒念佛
通るなり又寒念佛五六人

▲鉢叩
夜寒さの千本通り鉢叩

面白う叩かば泣かん鉢たゝき
落柿舎の日記に句あり鉢叩

▲十夜
月影や外は十夜の人通り

野の道や十夜戻りの小提灯
▲御命講
饅頭買ふて連に分つや御命講

▲御講
中山や狂女もこもる御命講

耶蘇祭小さき會堂おはれなる
八人の子供睦まじクリスマス

▲庭火
御社や庭火に遠き浮寐鳥

▲神留守
空蟬の羽衣の宮や神の留守

▲神送
留守狐御供狐を送りけり

御旅立籠の神を見送らん
赤幟疱瘡の神を送りけり

▲神の旅
後れたるちんばの神や神の旅

穴荒れて狐も留守や神の供
御留守には何事もなし神の旅

忍哉新婦

築地派の御講淋しや普請中

▲鴨
鴨ないて燈火消すや長酢亭

一つ家に鴨の毛むしる夕哉
古池や凍もつかで鴨の足

吊されて尾のなき鴨の尻寒し
古池や柳かれて鴨石にあり

つくと聞けば初鴨啼て居る

▲鷹
鷹据て人憩ひ居る野茶屋哉

それ鷹の斜めに下る嵐かな
献上や五十三次鷹の旅

▲鶴
はしたかのこぶし離れぬ嵐哉

▲鴉

橋際へ流れて来たか鴉

▲鴛鴦

人間のやもめを思へ鴛二つ
釣殿の下へはいりぬ鴛二つ
鴛鴦の向ひ合ふたり並んだり
古池の鴛に雪降る夕かな
夜嵐や鴛鴦の思ひ羽散りも敢す
静かさや鴛鴦の來て居る山の池

▲千鳥

満沙や清盛の塚に千鳥なく
川千鳥家も渡船もなかりけり
路ばたに餛鈍くふ人や川千鳥
待戀
船の音や吾脊子來べく川千鳥

▲水鳥

水鳥や菜屑につれて二間程
水鳥や焚火に逃げて洲の向ふ

▲鶺鴒

菜屑なぞ散らかして置けば鶺鴒
馬糞の側から出たり三十三才

▲暖め鳥

思ひわびて放す夜もあり暖鳥

▲梟

梟をなぶるや寺の晝狐

▲鱒

灯ともして鱒洗ふ人や星月夜

▲氷魚

氷魚も寄らず風の田上月の宇治
氷魚瘦せて月の雫と消えぬへし

▲鯨

百艘の船にとり巻く鯨かな
大ききも知らず鯨の二三寸
聲かけて鯨に向ふ小舟哉
日蓮上人發

鯨つく漁夫ともならで坊主哉

▲河豚

戀故に河豚には捨てぬ命哉
來年の事云へば鯨の笑ひけり
腹で死んで蓮の臺に生ればや
千島船覆没

ものゝふの腹に食はるゝ悲しさよ
河豚生きて腹の中にて荒るゝ哉
占へは啞喑河豚に咎なし
蕪村遺稿

▲生海鼠

冬の部に鯨の句多き句集かな
晴れもせず雪にもならず海鼠哉
海鼠くひ海鼠のやうの人ならし
無爲にして生海鼠一萬八千歳

▲乾鮭

乾鮭の阪東武者か最期か
乾鮭の頭めでたし鬼退治
里町や乾鮭の上に木の葉散る
乾鮭北より柚味贈南より到る
乾鮭の燭燵に風の起る哉
鯨乾鮭を讒すれば海鼠黙々たり
乾鮭は成佛したる姿かな
乾鮭の切口赤き厨か
乾鮭や市にかくれて貧に處す

乾鮭は魚の枯木と申すべく
乾鮭や頭は剃らぬ世捨人
老僧は人に非ず乾鮭は魚に非ず

題蘇村小照

乾鮭に目鼻つけたる御姿
乾鮭を貰ひ密柑を贈りけり
熊賣て乾鮭買うて歸りけり

▲冬の蠅

日のあたる硯の箱や冬の蠅
膝かくす紙衣やふれて冬の蠅

▲落葉

湖の上に舞ひ行く落葉哉
尼寺の佛壇淺き落葉かな

御手の上に落葉たまりぬ立佛
落葉かき小枝拾ひて親子哉
椽に干す布團の上に落葉哉
捨舟の落葉かき出す日和哉
吹きたまる落葉や町の行止り
首入れて落葉をかふる家鴨哉
堀割の道じくく落葉哉
窓の影夕日の落葉頻りなり
妹か垣根古下駄朽ちて落葉哉
落葉して塔より低き銀杏かな
落葉して老木怒る姿あり
鶏の垣を出て来る落葉かな
山行けは御堂々々のおち葉哉
はらくと身に舞ひかゝる落葉哉
古家や狸石うつ落葉の夜

▲木の葉

散れば焚きくして木の葉哉
木の葉焼く寺の後や普請小屋
木の葉はらく幼子に逢ふ小坂哉
吹下す風の木の葉や壇かつら
木の葉折々病の窓を打て去る
木の葉散る奥は日和の天王寺
ほろくさるりの木の葉燃てなし

▲枯葉

枯葉鳴るくぬ木林の月夜かな

▲散紅葉

愚庵十二勝

錦楓畦

紅葉散りて夕日少あし苔の道
紅葉降る岡の日和や除幕式

●冬之部

▲枯柳

門前の小溝にくさる紅葉哉
紅葉ちる山の日和や杉の露

▲枯榎

燐寸賣る燈火細し枯柳
枯柳八卦を畫く行燈あり

▲冬木

一もとの榎枯れたり六地藏
小幟や狸をまつる枯榎

▲枯尾花

こどくく葉をかけたる冬木哉
片側は冬木になりぬ町はづれ
古道に馬も通らぬ冬木かな
無花果の鈍な枯れやうしたりけり

枯尾花水なき河の廣さかな

枯尾花焼場へ曲る小道哉

枯尾花人呼ぶ茶屋の婆々もなし

欄柯石

野狐死して尾花枯れたり石一つ

▲枯 芒

七湯の烟淋しや枯すゝき

からけたる繩のゆるみや枯芒

▲枯 菊

自來也も墓も枯れたり團子坂

枯菊に氷捨てたる朝日かな

傘さして菊の枯れたる日和哉

▲枯 蓮

蓮十里こゝく枯てしまひけり

▲枯 萩

枯萩や日和定まる伊良子崎

枯萩や日和のつゝく渡跡

▲枯 蔦

枯蔦や石につまつく宇都の山

枯蔦や賣家覗く破れ門

▲枯 草

水草や水ある方に枯残る

夕顔の枯れにし宿や狂女すむ

龍膽や芒の中に枯残る

草枯や一もこのこる何の花

草枯るゝ賤の垣根や枸杞赤し

▲大 根

根岸を出て

日暮里や大根かけたる格子先

大根干す檐の日向や鶉の籠

▲葱

ある夜葱筑波風に折れ盡せり
山里や木立を負うて葱の畠
葱汁や京の下宿の老書生

▲冬 菜

水引くや冬菜を洗ふ一構へ

▲干 菜

したゝかに干菜釣りたり一軒家

▲冬 の 花

築地行けば垣根の薔薇や冬の花

▲水 仙 花

水仙の蕾に星の露を孕む

賀新菜

何も彼も水仙の水も新らしき

水仙や物もあげざる菫の神

唐草の安さを賣るや水仙花

●冬之部

有明の水仙剪るや庭の霜
軸の前支那水仙の鉢もなし
日あたりや馬場の跡なる水仙花
古書幾卷水仙もなし床の上

▲石 蔭 花

金藏の壁に日當る石蔭の花

日あたりぬ厠の陰や石蔭の花

日のあたる鍋の水や石蔭の花

▲寒 菊

上人のたより稀なり冬の菊

寒菊やいも屋の裏の吹透し

濕氣多き根岸の庭や冬の菊

寒菊の上にももの置く家陰かな

▲冬 薔 薇

菊枯れて冬薔薇清む小庭哉

▲冬牡丹

馬糞のぬくもりに咲く冬牡丹
容與たる芭蕉の像や冬牡丹

▲歸花

木老いて歸花さへ咲かざりき
腐り盡す老木と見れば歸り花
歸り咲く八重の櫻や法隆寺
川崎や鳥は梨の歸り花

▲茶の花

茶の花の中に交りて茶の實哉
活けて久しく茶の花散りぬ土達磨
茶の花や坊主の頭五つ六つ
茶の花や庭にもあらず野にも非ず
茶の花に梅の古木を愛す哉
茶の花の二十日餘りを吾病めり

▲山茶花

菓子赤く茶の花白き忌日哉
山茶花や鳥居小さき胞衣の神
山茶花や小供遊はす芝の上
山茶花の垣根に人を尋ねけり
山茶花に犬の子眠る日向かな
山茶花を雀のこぼす日和哉
山茶花や病みて琴ひく思ひ者
杉垣に山茶花ちるや野の小家

▲冬の梅

年送る銀座の裏や冬の梅
千駄木に隠れおほせぬ冬の梅
こころくく紅蕾む室の梅
寒梅
横笛吹けけりな寒梅二三輪

歳見わた冬あたらかや硝子窓

▲冬 雜

本所區に編入されぬ冬住居
住み馴れて冬の蜆や 向島
筆ちびてすかれし冬の日記哉

平家を聴く

煎餅干す日影短し冬の町
下總や冬あたらかに麥畑
大木のすつくと高し冬の門
家二軒杉二本冬の鴨とぶ
朝な／＼粥食ふ冬となりけり
髯のある雜兵どもや冬の陣
小百姓冬物買に出たりけり
伐株や紅盡さし冬の園

●冬之部

明治四十一年十月廿八日印刷
明治四十一年十月卅一日發行

定價金參拾錢

(集句規子)

製複許不

編纂兼發行者

東京市本所區北二葉町十三番地
瀨川嘉

助

印刷者

東京市神田區銀治町五番地
志田和

作

印刷所

東京市神田區銀治町五番地
久保田印刷部

發行所

東京本所區
北二葉町十三

文山堂

賣捌

東京堂

至誠堂

文榮閣

17
368

64

發行元

東京

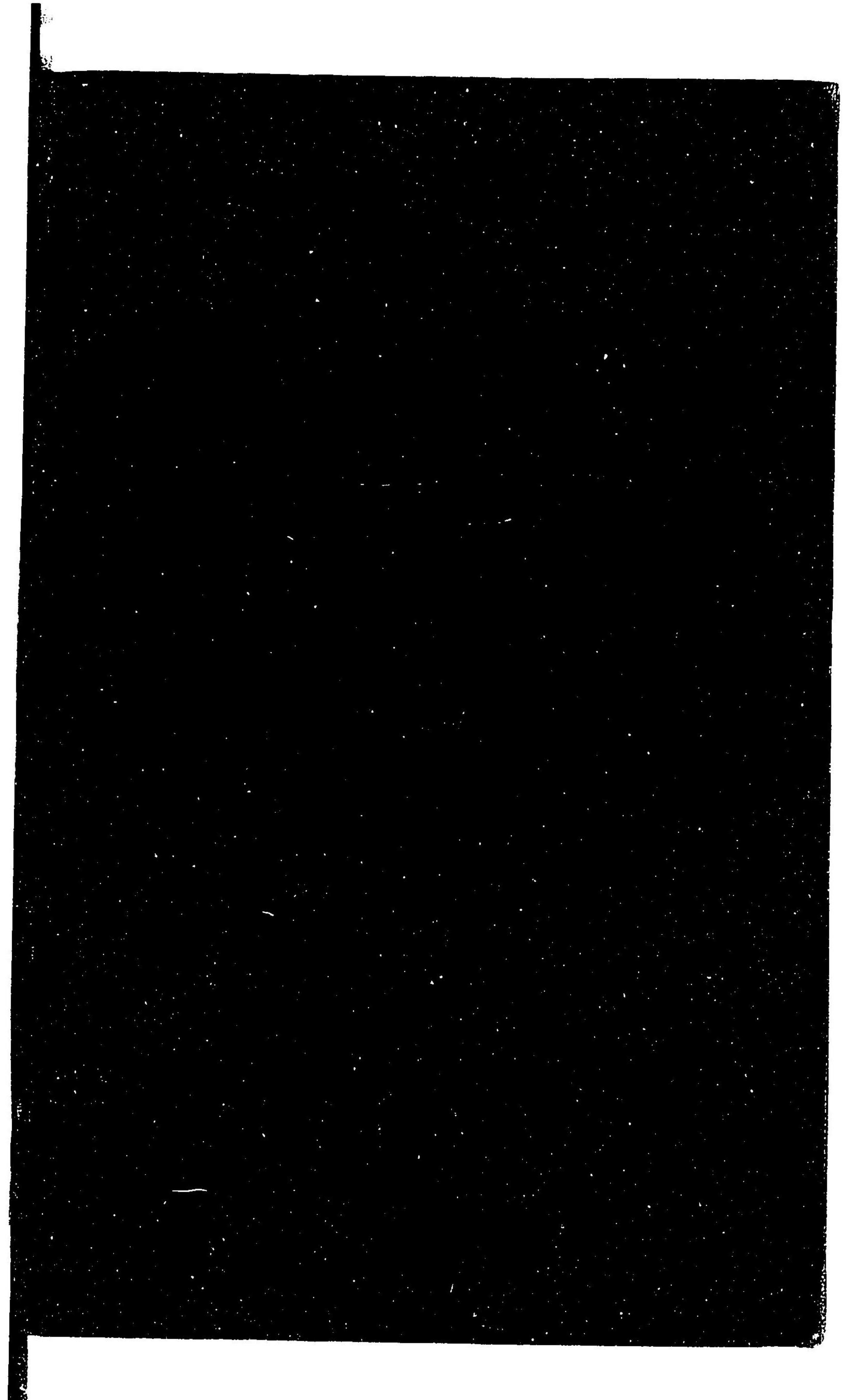
文

山

堂

64

17
368



087070-000-2

17-368

子規句集

瀬川 疎山/編

M41

DBE-0241



